

茨城県行方郡麻生町

# 道城平遺跡

第2次発掘調査報告書

2002年6月

道城平遺跡第2次発掘調査会  
麻生町教育委員会

## 序

麻生町は霞ヶ浦と北浦の二つの大きな湖に面し、水と緑の豊かな自然に恵まれています。古代より人々が生活するうえで、恵まれた環境であった本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財がたくさん残されています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性をふまえ、その対応に努力しているところです。

麻生町麻生の土砂採取場計画地内には、埋蔵文化財が所在しておりました。文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することになりました。

調査にあたり、県教育庁文化課の指導のもと鹿行文化研究所・汀 安衛氏を調査主任として、地元の方々の協力を得て調査を完了することができました。ここに関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

また、調査経費を負担していただきました有限会社茂木建材取締役茂木宗五郎氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待申し上げごあいさついたします。

平成14年 6 月

道城平遺跡第2次発掘調査会長  
麻生町教育委員会教育長

橋 本 豊 榮

## 例 言

1. 本報告書は、茨城県行方郡麻生町麻生道城平 1656 番地 他に所在する 道城平遺跡 二次調査（道城平西遺跡）の報告書である。
2. 本遺跡の調査は、土砂採取に先行する事前調査である。調査対象面積は、約 150㎡であったが新貝塚の発見等により 400㎡に達した。
3. 本遺跡の調査は、平成 8 年 7 月に先端部の調査（一次）が行なわれた。今回は隣接した道城平西遺跡の部分から住居跡、土坑、貝塚が発見され二次調査として行なった。
4. 調査は、平成13年 5 月24日から 7 月 5 日の期間に延べ18日行なった。調査時点で遺跡の大部分は欠失、僅かに残った部分の調査である。したがって本遺跡の性格、時期、範囲について把握は出来ない。遺跡面積は推定 5,000㎡、遺構は袋状土坑等が跡地の状態から推察された。
5. 本調査は、鹿行文化研究所の 汀 安衛 が担当し、調査員に西田和子があたった。整理は、汀、西田が行い、報告文の作成は汀が行なった。貝塚については別冊で報告し、今回は遺構と遺物についてである。
6. 本遺構の平面図は原則的に 1/30、遺物実測図は 1/10、水系レベルは図中に表示した。
7. 調査に際し茂木建材、行方地方広域シルバー人材センターに協力を受けた。
8. 本調査の組織は次のとおりである。

### 道城平遺跡第 2 次発掘調査会役員

役 職	氏 名	所 属
会 長	橋 本 豊 榮	麻生町教育委員会教育長
副 会 長	辺 田 弘	麻生町文化財保護審議委員会会長
理 事	羽 生 幸 三	麻生町文化財保護審議委員会委員（麻生地区）
〃	羽 生 均	麻生町文化財保護審議委員会委員（麻生地区）
〃	平 輪 一 郎	麻生町文化財保護審議委員会専門調査員
〃	植 田 敏 雄	麻生町文化財保護審議委員会専門調査員
〃	汀 安 衛	調査主任 鹿行文化研究所
〃	茂 木 宗五郎	有限会社茂木建材 代表取締役
〃	高 木 俊 博	麻生町教育委員会生涯学習課長
監 事	橋 本 政 衛	有限会社茂木建材
〃	小 室 旭	麻生町会計課長
幹 事	関 川 宏	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	高 田 和 明	麻生町教育委員会主事

9. 現地調査では、横田泰隆、徳利初代、福沢恵子、菅谷益尚、行方地方広域シルバー人材センターの方々にお世話になりました。
10. 調査、報告書作成に際し茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、歴史館 斎藤弘道氏に多大なご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

# 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
挿図目次	
写真図版目次	
第Ⅰ節 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ節 調査に至る経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査日誌	1
第Ⅲ節 調査の概要	3
第Ⅳ節 遺構と遺物	5
1. 縄文時代の遺構と遺物	5
(1) 住居跡	5
第2号小堅穴状遺構	5
第4号小堅穴状遺構	5
第10号小堅穴状遺構	8
第11号小堅穴状遺構	8
第12号小堅穴状遺構	8
第14号小堅穴状遺構	8
(2) 土 坑	11
第1号土坑	11
第2号土坑	11
第3・3'号土坑	11
第4号土坑	11
第6号土坑	11
第9・9'号土坑	12
第10号土坑	14
第13号土坑	15
第13'号土坑	15
2. 古墳時代、奈良時代の遺構と遺物	16
(1) 住居跡	16
第1号住居跡	16
第3号住居跡	16
第15号住居跡	18
(2) 土 坑	18
第5・5'号土坑	18
第7号土坑	18
第8号土坑	18
第11号土坑	20
● 土坑A、B号土坑	20
3. 溝	20
4. 表採遺物	21
第Ⅴ節 総 括	23

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺の地形及び位置図	2
第 2 図	遺構全測図	4
第 3 図	第 2 号小堅穴状平面図・出土遺物実測拓影図	6
第 4 図	第 4 号小堅穴状平面図・出土遺物実測拓影図	7
第 5 図	第 10 号小堅穴状平面図・出土遺物実測拓影図	9
第 6 図	第 11・12 号小堅穴状平面図・出土遺物実測拓影図	10
第 7 図	第 14 号小堅穴状平面図・出土遺物実測拓影図	
第 8 図	第 1・2・3・3'・4 号土坑平面図	12
第 9 図	第 5・5'・6・7・8・9・9'・10・11・12・13 号土坑平面図	13
第 10 図	第 1・3・3'・4・5・5'・6・8・9・10 号土坑出土遺物実測拓影図	14
第 11 図	第 13' 号土坑平面図・出土遺物実測拓影図	15
第 12 図	第 3 号住居跡平面図・出土遺物実測拓影図	16
第 13 図	第 1 号住居跡平面図・出土遺物実測拓影図	17
第 14 図	第 15 号住居跡平面図・出土遺物実測拓影図	19
第 15 図	土坑 A・B 平面図	20
第 16 図	第 1 号溝平面図	21
第 17 図	表採遺物実測拓影図	22

## 写 真 図 版 目 次

PL-1	調査区全景と小堅穴状遺構及び土坑
PL-2	土坑と小貝塚、作業風景
PL-3	調査区西側小地点貝塚出土遺物
PL-4	2 号、4 号、10 号、11・12 号、 1・3・3'・4・5・5'・6・8・9・10 号出土遺物

## 第 I 節 遺跡の位置と環境

本遺跡は麻生町役場の東北約 1 km、麻生警察署の南側 300m、標高 33m 程の台地上に占地している。付近は富田地区から入り込む溺れ谷が複雑に開析されている。遺跡はこうした支谷に囲まれ、半島状に伸びる台地基部に近い位置に形成されていた。

自然環境に恵まれた遺跡周辺には縄文時代中期の道城平遺跡（一次調査、貝塚を伴う）台地基部の道城平貝塚、谷を挟み西側には大麻貝塚、小屋下城跡（館）、二本木城跡（砦）、縄文時代の貝塚を伴う四部切遺跡、前期末のワラビ台遺跡、麻生城跡、麻生陣家跡等史的環境に恵まれた中にある。遺跡の南側は大部分山林原野の為、明確に遺跡が把握されていないのが現状である。

その他、現在遺跡が登録されていないが富田から麻生にかけての沖積地には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が存在することを提起しておきたい。

（遺跡の把握は、慎重を期するに越した事はないと実感した。縄文時代中期の遺跡が壊滅に近い状況を呈した事実を重く受けとめ、教訓としなければならないと痛感した。）

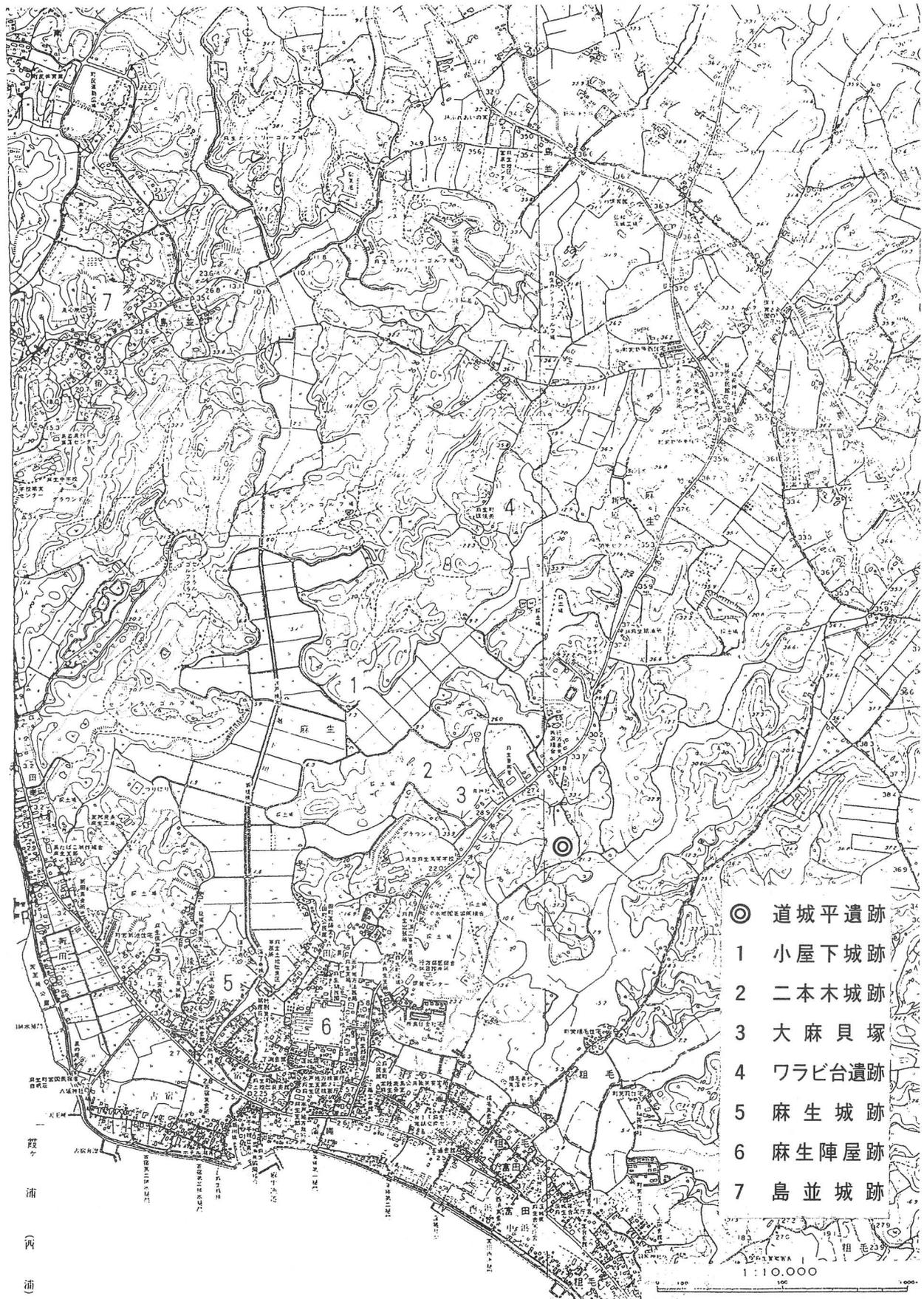
## 第 II 節 調査に至る経過

### 1. 調査に至る経過

- 13年 2月9日 埋蔵文化財の所在の有無について（照会）
- 2月14日 現地確認
- 2月27日 埋蔵文化財の所在の有無について（回答）
- 4月20日 茂木建材との打合せ
- 4月27日 調査会発足
- 4月28日 調査開始
- 5月22日 調査終了とする。

### 2. 調査日誌

- 4月21日 現場確認、大半が削平され僅かに150㎡部分に遺構が確認される。
- 4月23日 三者で協議、見積書作成。
- 4月26日 緊急調査になる。テント設営、遺構プラン確認作業。
- 4月28日 1号土坑より調査開始する。引き続き遺構プラン確認作業続行。
- 4月29日 1号土坑、2号土坑土層作図、1号住居跡調査開始。
- 5月1日 1号住居跡土層作図、不明土坑調査、10号小堅穴調査。
- 5月2日 1号住居跡遺物上げ、2・3号土坑平面図、10号小堅穴土層作図。
- 5月7日 3号住居跡の下の4号小堅穴調査、調査区北端の畑地部分に貝塚確認。
- 5月8日 10号小堅穴平面図、11号小堅穴調査。



第1図 遺跡周辺の地形及び位置図

- 5月9日 10・11号小堅穴土層、平面図作成、14号小堅穴調査。
- 5月10日 11号小堅穴土層、平面図作成、土坑調査。
- 5月11日 1号住居跡焼土調査、14号小堅穴遺物あげ、12号土坑土層作図。
- 5月12日 本日から貝塚部分調査、確認トレンチを南北に設定し調査。
- 5月14日 貝塚の断面図作成6層まで、幅40cm、長さ5m、深さ60～80cm。
- 5月15日 1・2層は僅か、混貝、純貝層、3層も調査部分で50袋前後、遺物少なし。
- 5月16日 4層調査、混土貝層、かなりの傾斜をもつ。下端に流れがありそう。
- 5月17日 遺跡の調査終了、貝塚は4層まで調査、6層の混土層調査。遺物、骨少ない。
- 5月18日 6層調査、歴史館 斉藤弘道氏見学。
- 5月19日 北側の混貝層4層調査、貝層厚い、ハマグリは少ない。
- 5月21日 南側1A層調査、貝殻は500袋を越える。かなりの大規模な貝塚になる。
- 5月22日 1A層北側調査、予算不足が見えてきた。増額はなし。
- 5月25日 予算の追加は無い為打切りの作業に入る。中央部ベルト作図し調査。
- 5月26日 北側4層調査、前述の雨でぬかるみである。土嚢500袋上の農道に上げる。
- 5月28日 ベルト3層の遺物あげ、北側4層調査土器、骨は少ない。  
ベルト1A、1層調査、遺物作図取り上げ、農道の整備、教委と打ち合せ。
- 5月29日 遺物、貝殻を事務所に搬入、2トンダンプで4台一日かかる。道具、テントかたづけ5時前に終了、予算と共に心身もくたびれた。整理予算なし。

### 第Ⅲ節 調査の概要

本遺跡は、調査以前に周辺が削平され町当局は遺跡は無いと回答した。調査開始日の次の日に許可が下りる予定であった。そういった状況下での『遺跡が残存するため』調査になった。遺跡全体の約 $\frac{1}{20}$ 前後が遺存していた状況であった。

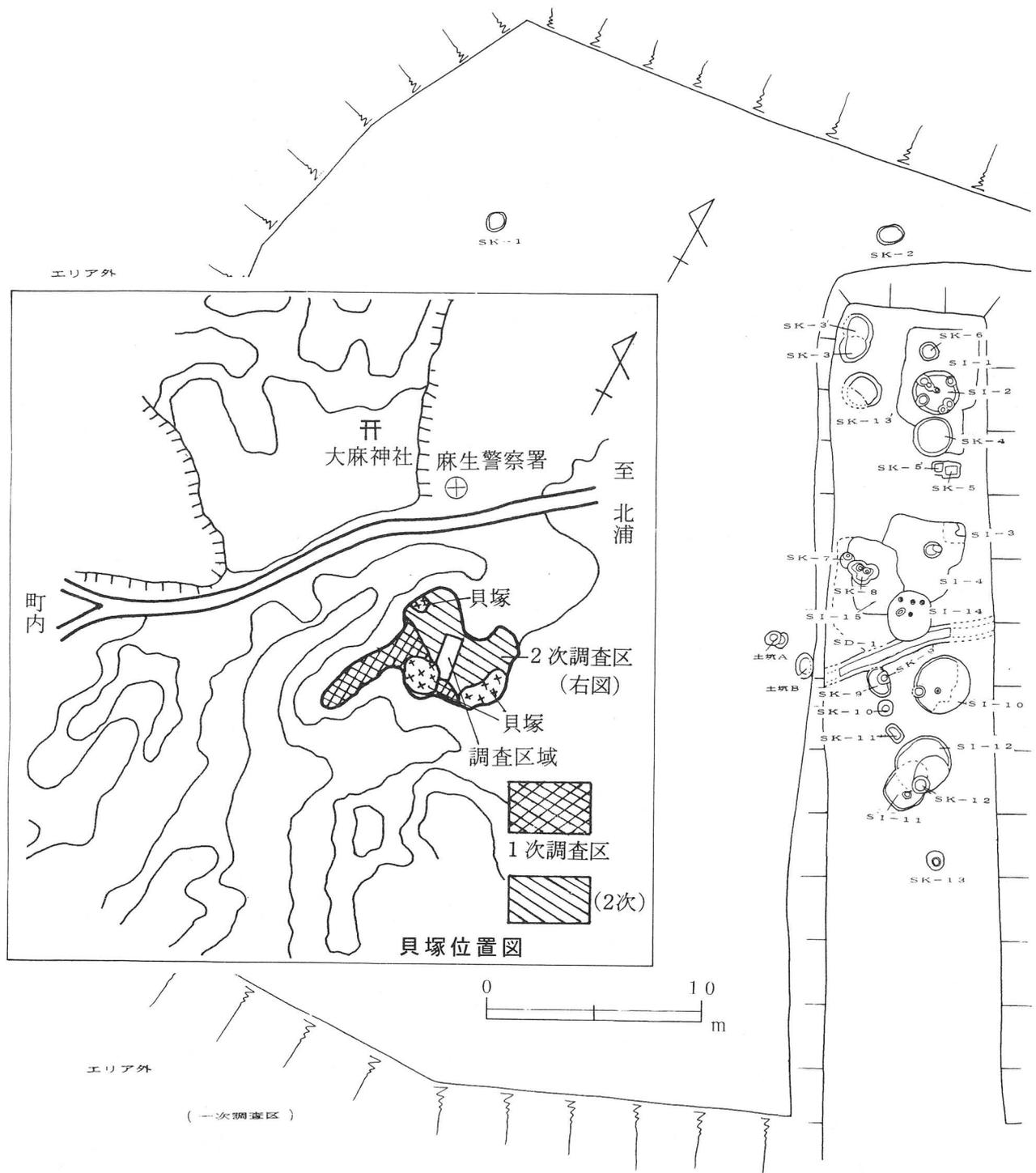
削平部分の確認、一部旧表土残存面の $150\text{m}^2$ 程に住居跡、土坑等が20基前後認められ調査に入った。遺構は大半が攪乱を受けて欠失、または上面が削平され掘り込みが $10\sim 20\text{cm}$ のものも多く、遺構プランが確定出来ないものも多かった。

時期的には縄文時代前期の遺物、須恵器等が認められ幅のある遺跡と推察された。調査の結果は、縄文中期後半の加曽利E式前半の遺物、遺構が検出された。また古墳時代の土坑、奈良時代の遺物攪乱遺構等が検出された。

遺構の西側の斜面下部の小凹地から貝殻、土器の散在が認められ少量の貝と500片程の縄文土器が検出された。遺物は浮島式土器、阿玉台式、加曽利E式等が主体を占めた。また削平部分にシラトリガイ、サルボウが散在し貝層を伴った土坑の存在が斜面の貝塚からも推察出来る。また西側では明確な貝層は確認出来なかった。

遺構東側の緩やかな斜面部には約 $1,000\text{m}^2$ 程の大規模な貝塚の存在が確認され一部調査し協議の結果、保存と決定した。

貝塚は、調査部分で阿玉台式～加曽利E式が認められ、本時期に形成されたと理解した。貝類は、シラトリガイ、アサリが量的に多く見られ、アカニシ、サルボウの生育は比較的よく、特に



第2図 遺構全測図

イタボガキの出土、利用が一次調査に比べ多く見られた。これらはいくまでも調査時点の観察結果であり、水洗い、整理分類を進めなければ断定、仔細は定かではない。

本貝塚部分については予定以外の部分で、整理予算の追加は無く本報告では割愛せざるを得ない事となった。地形的に貝塚は東側台地集落のものと推察され調査した遺構との関連は薄い。『道城平遺跡第2地点貝塚』として整理を進め、済み次第刊行したい。

## 第Ⅳ節 遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構と遺物 (第2図)

調査によって縄文時代の小堅穴状跡5基、土坑9基、古墳、奈良時代の住居跡3軒、土坑5基が検出された。範囲は広いが遺構の遺存していた面積は約150㎡であり全体の9割り以上は削平され、確認時の遺構も一部消えた。僅かに北側に生きていたに過ぎなかった。

貝塚は、確認調査時には発見出来ず調査を開始した時点で、調査員の西田和子が確認した。そのため予算の面で欠落していた。結果的には全面保存という結果に納まった。

その他、西側の一部に少量の貝の堆積が認められた。土器の包含層は広く、3層がみられたが時期的には一次、二次調査のものとのさほどの差異はない。以下縄文時代、古墳、奈良時代の遺構に分けて後述したい。遺構番号が交錯するが、これは調査時に攪乱が激しく当初から時期の判別が不可能に近かった為である。従って相当の奈良期の遺跡が推察されたが遺構としては皆無に近く、遺物のみの採集に終わった感がある。

以下各遺構と出土遺物について述べる。小堅穴状としたものには、土坑として捉えるべきと思われるものも一部含まれる。

#### (1) 小堅穴状遺構

##### 第2号小堅穴状遺構 (第3図)

本遺構は、調査区の北端に位置し1号住居跡の下に検出された。径2・1m前後の円形状プランをもつ遺構である。掘り込みは40cm程とやや深い。床面はそれほどの締りはなくローム剥出しの感がある。円形の隅にP-1・2・4・5が掘り込まれ位置関係から柱穴の可能性がある。掘り込みは径20~35cmで深さは30~40cmである。その他3・4・7のピットが見られる。壁面の立ち上がり角度は垂直に近い。

覆土は6層に分けられ、レンズ状のほぼ自然埋積と推察できる。粘性、締りはある。これは上部の住居跡との関係を考慮しなければならない。炉は、検出出来なかった。

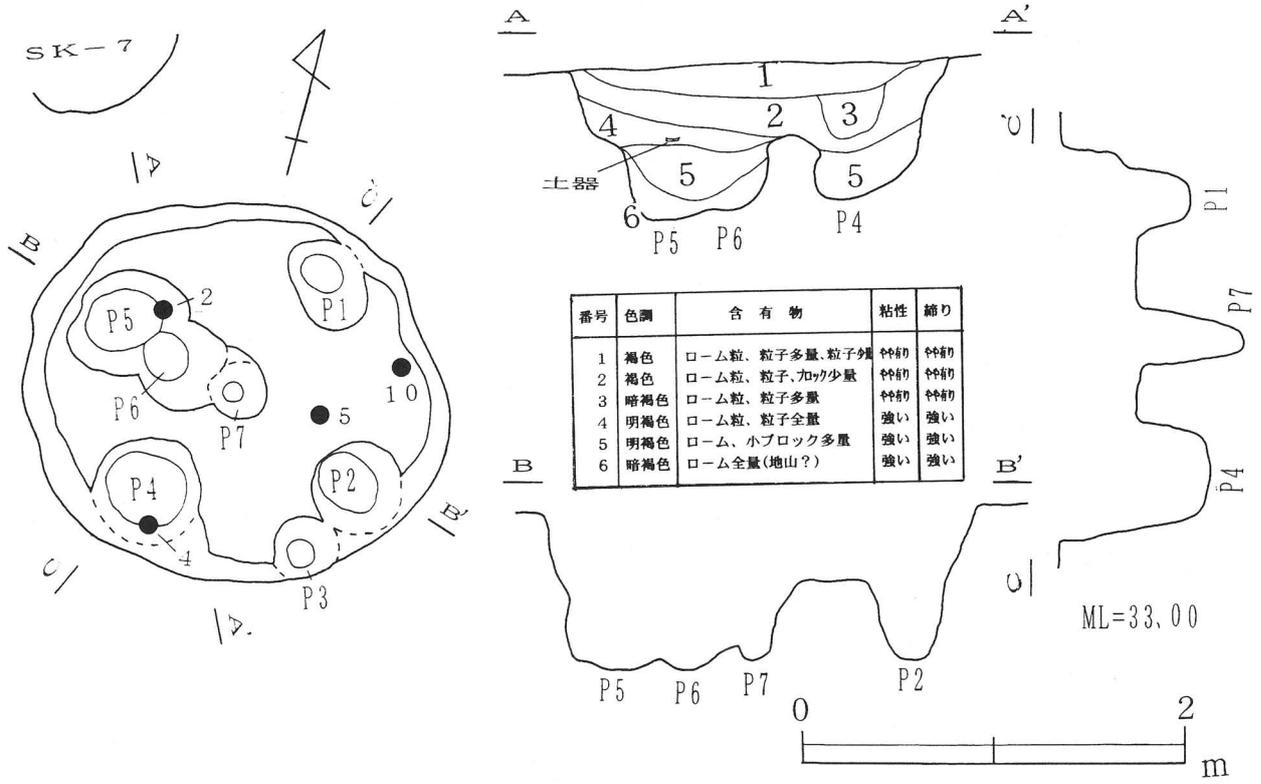
遺物は、図示したほか細片が10片程見られた。床面からの出土は無く、いずれも5~20cm程浮いた状態で出土した。1は小型の鉢型土器と思われる口縁部で一条の沈線、垂下する沈線がみられる。2~6までは加曾利E式の新しい時期で狭い磨消部を持ち沈線区画が見られる。口縁部のキャリパーは見られない。7~10は土器片錘で最大67g、7は15gと幅がある。

これらの遺物から中期後半加曾利EⅢ式の遺構と推察される。

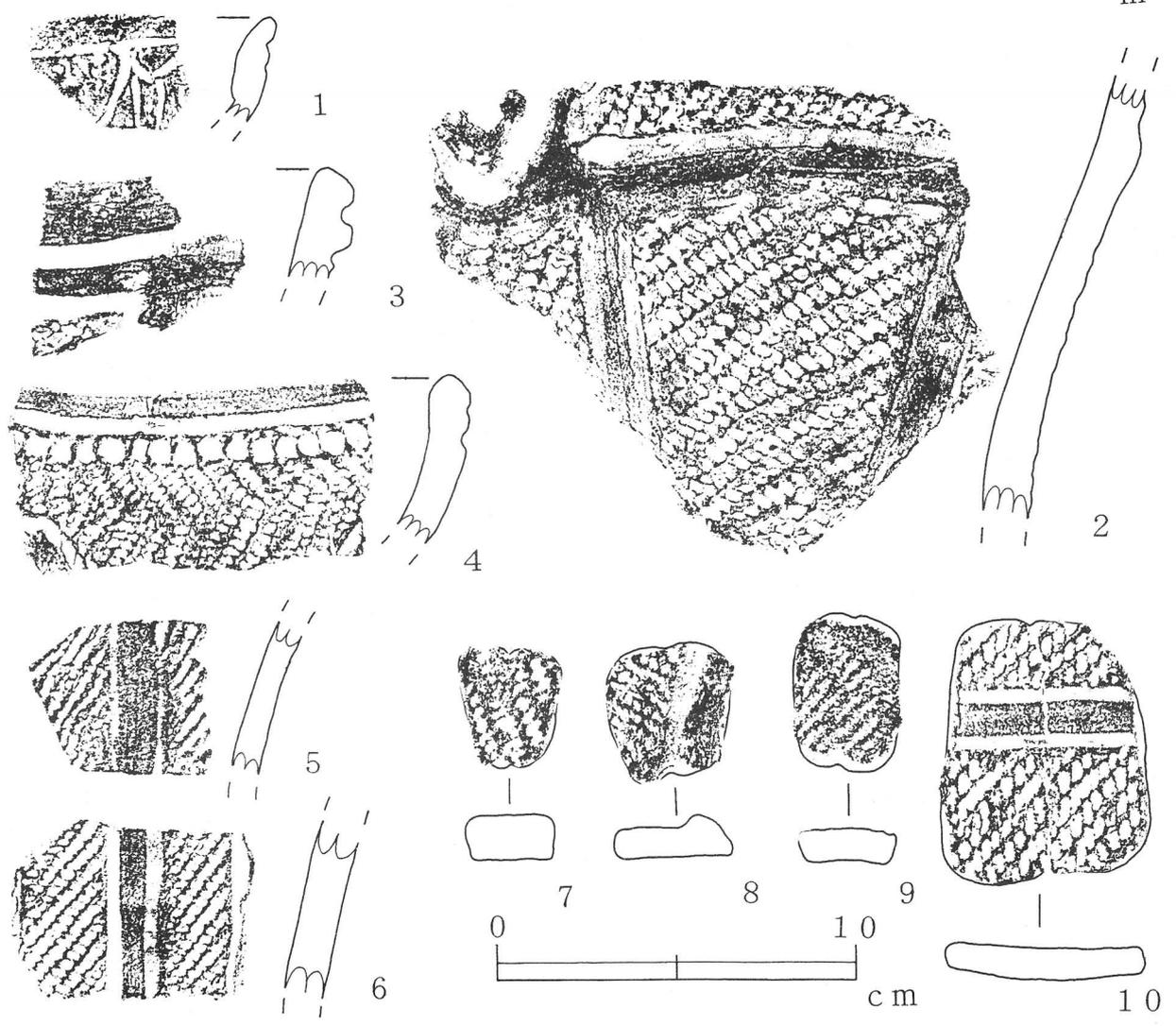
##### 第4号小堅穴状遺構 (第4図)

本遺構は、2号住居跡の南側10mに位置し検出された。全体のプランは不明であるが3・7m前後の隅丸の住居跡か、検出された中央部に長径90cm程の倒卵形状の炉跡が検出されている。柱穴、立ち上がりは明確では無い。炉跡周辺の床面はしっかりしている。

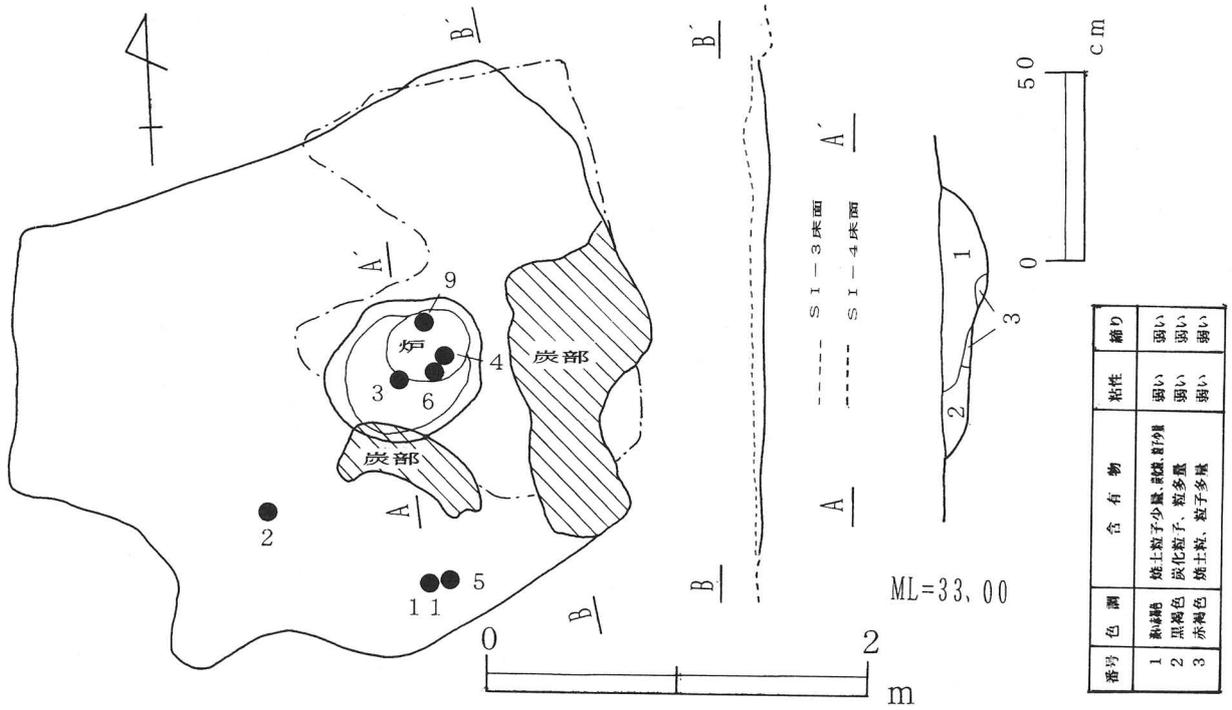
遺物は炉内部と周辺の床面から出土しているが非常に少ない。1は磨消され内側に赤彩が見られる。2は口唇部にやや太い沈線をもち器面は磨消され器肉の厚い土器で阿玉台式である。3~6は沈線区画による磨消がみられる。前述の時期と大差はないと思われる。7~10は土器片錘で小型のものは10g、一部欠ける9は35gと幅が見られる。11は軽石で片面はほぼ平坦で使用の痕



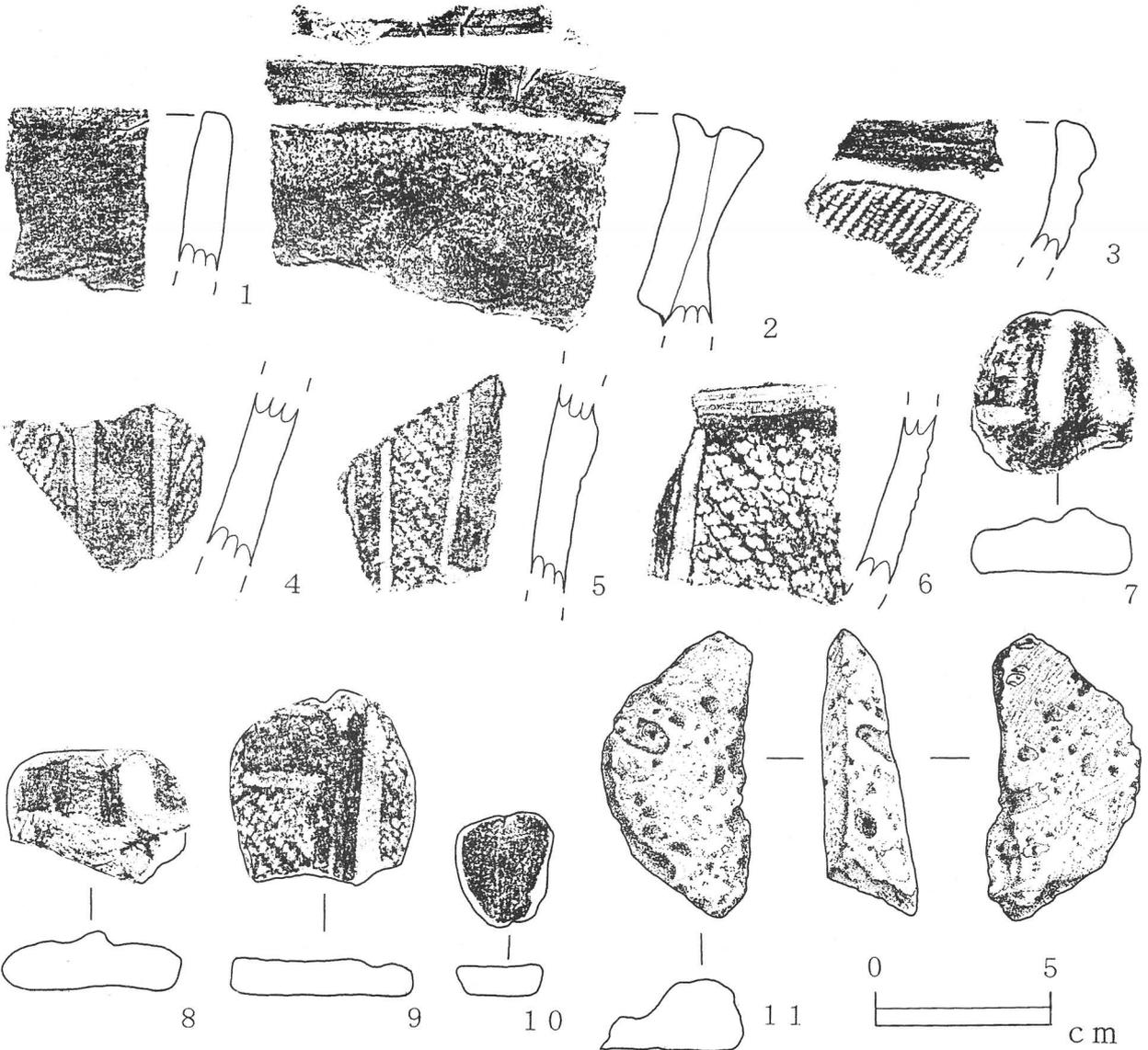
番号	色調	含有物	粘性	締り
1	褐色	ローム粒、粒子多量、粒子塊	中弱	中弱
2	褐色	ローム粒、粒子、カク少量	中弱	中弱
3	暗褐色	ローム粒、粒子多量	中弱	中弱
4	明褐色	ローム粒、粒子全量	強い	強い
5	明褐色	ローム、小ブロック多量	強い	強い
6	暗褐色	ローム全量(地山?)	強い	強い



第3図 第2号小堅穴状遺構平面図・出土遺物実測拓影図



番号	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	粘土粒子少量、炭灰粒子	弱い	弱い
2	黒褐色	炭化粒子、粘土多量	弱い	弱い
3	赤褐色	粘土粒、粘土多量	弱い	弱い



第4図 第4号小堅穴状遺構平面図・出土遺物実測拓影図

跡認める。重さ17g。

出土遺物から2号小堅穴状遺構同様の時期が想定出来る。

#### 第10号小堅穴状遺構（第5図）

本遺構は、4号小堅穴状遺構の南側6mに位置し検出された。長径2.8m、短径約3m程の長円状プランの遺構と推察される。東側約 $1/2$ は欠失している。掘り込みは20cm前後で浅く、遺存する床面は締りをもつ。西側の壁面、中央やや南寄りにピットが見られ1は外側に掘り込む、2は円筒状掘り込み、炉跡は検出出来なかった。

遺物は、少なく総数20片であった。1は胎土に多量の繊維をふくむ前期黒浜式土器、2は半截竹管による平行沈線による施文があり前期の浮島式土器口縁部。3は太い隆起線の上には縄が施文され胎土に少量の金雲母をふくむ中峠式。4は口縁部を欠失するが渦文を持ちキャリパー状器形。5は磨消部に沈線を施しつ加曾利E式。6、7は底部で前述の土器の底部と推察される。出土遺物から加曾利E式の遺構である。

#### 第11号小堅穴状遺構（第6図）

本遺構は、10号小堅穴状遺構の南側3mに位置し長径2.5m短径1.8mの長円形プランは呈する。掘り込みは床面はやや締りをもつ。中央部に径30cm前後、深さ30cm程の円筒状の掘り込みが見られた。炉跡は検出出来なかった。

遺物は、皆無に近く小破片3片であった。図示したのは土器片錘1点のみで15g。

出土遺物、複合関係にある12号小堅穴状遺構との関係から加曾利E式の新しい時期が推察される。

#### 第12号小堅穴状遺構（第6図）

本遺構は、11号小堅穴状遺構の下に位置する。径2.6m程のやや楕円形気味のプランである。掘り込みは10cm程ではほぼ平坦、締りはややある。南側に小ピットが認められた。

遺物は5以外は、やや浮いた状態で出土した。1は隆起線文区画の上に角押文を施す阿玉台式土器。2は、縄文地に沈線区画がなされる胴部破片。3は、磨消の口縁部に太い沈線が施文される土器で加曾利E式の新しい時期。5は、口唇部が角張る土器で半截竹管押し引き文が見られる阿玉台式土器で胎土には金雲母、長石が多量に混入されている。6は、重さ10gの土器片錘。7は、半截竹管による平行沈線文が施され、胎土に砂の混入の多い浮島式土器で器肉は薄い。

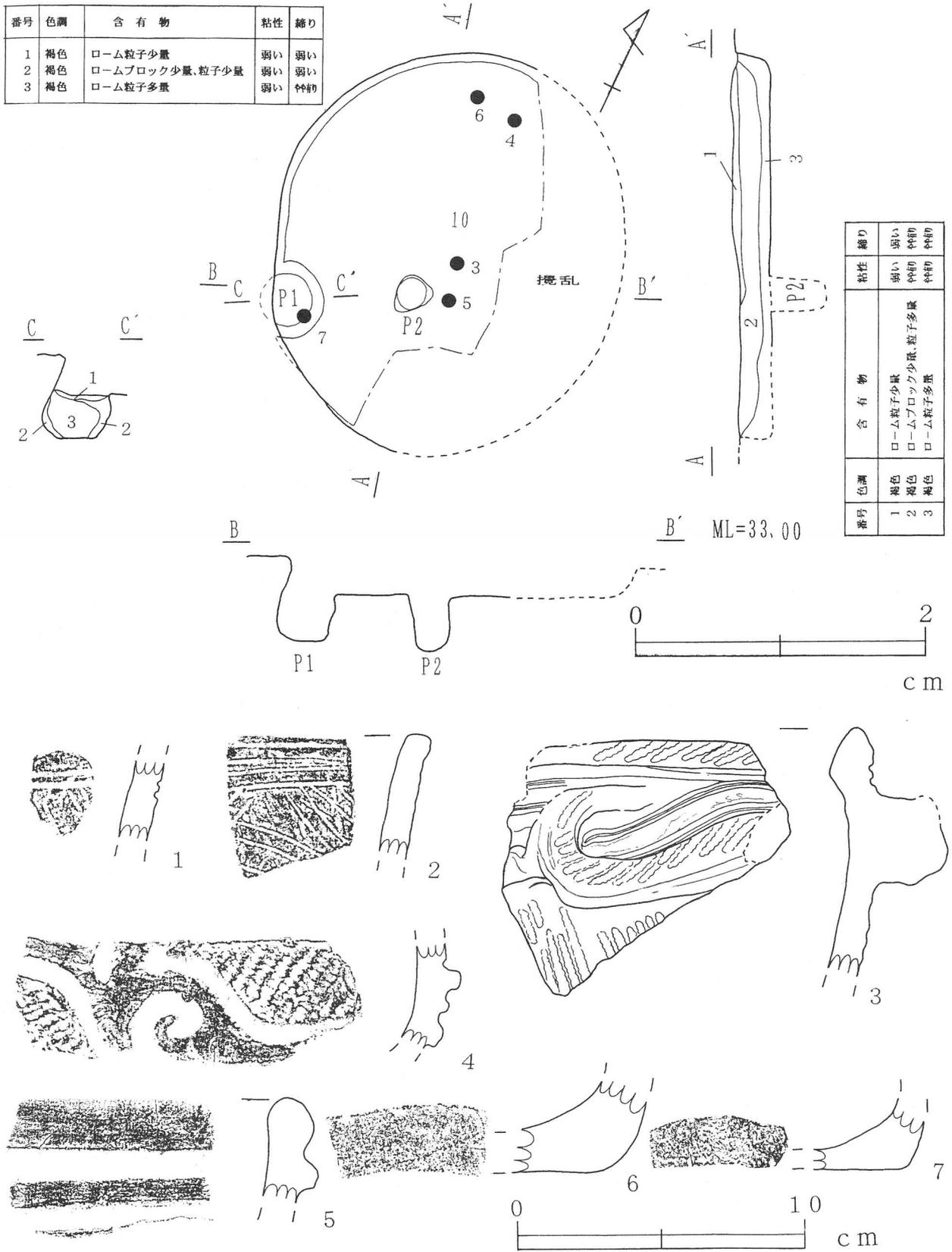
出土遺物から加曾利E式期の遺構と推察する。

#### 第14号小堅穴状遺構

本遺構は、4号小堅穴状遺構と10号小堅穴状遺構の間に位置し4号小堅穴状遺構の南側、一部複合関係にある。西側の一部は15号小堅穴状遺構の下部に位置する。長径2.5m、短径2mで南北にやや長く楕円気味のプランを呈する。掘り込みは40cmとやや深く、床部の一部はフラスコ状に掘り込む部分も見られた。覆土は6層認められたが5、6層はピットの土層である。床面の締りは良い。炉跡等は検出出来なかった。ピットが5基検出され皆北側に寄った位置に認められた。規模、プランもさまざま掘り込みは円筒状と（1、3）やや膨らむ4、5がある。

遺物は床直は無く、いずれも若干浮いた状態で出土している。口縁部が外反する土器と山状の

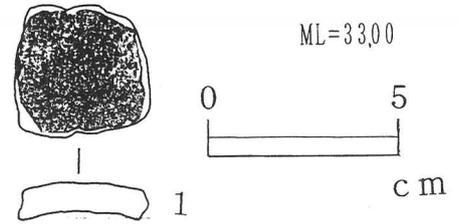
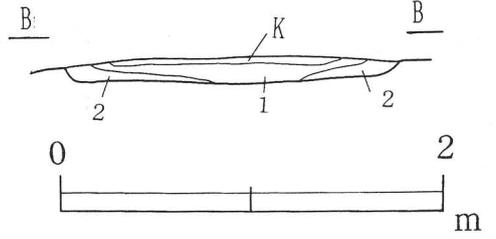
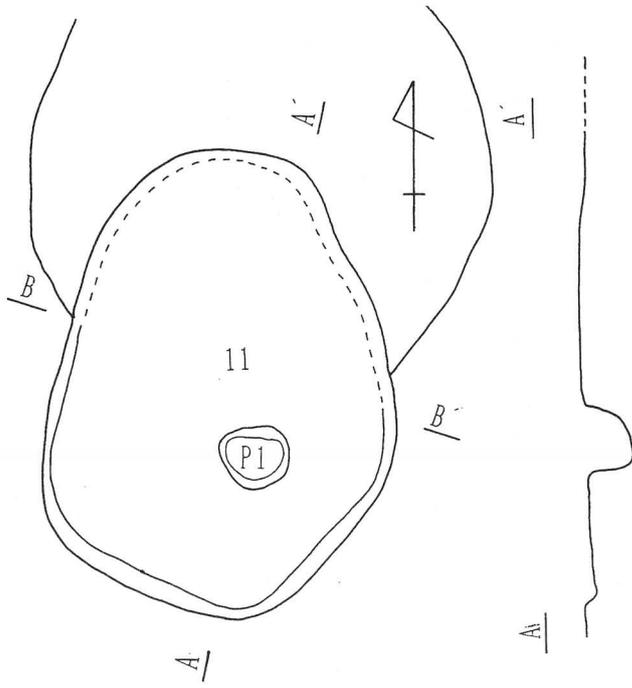
突起部分に押圧が入り、沈線による区画がなされる土器で胎土に雲を含む中峠式土器。口唇部、口縁部に沈線が施文、隆帯区画がなされている加曾利E II式がみられ、底部で時期は不明。出土遺物から加曾利E II式期の遺構か。



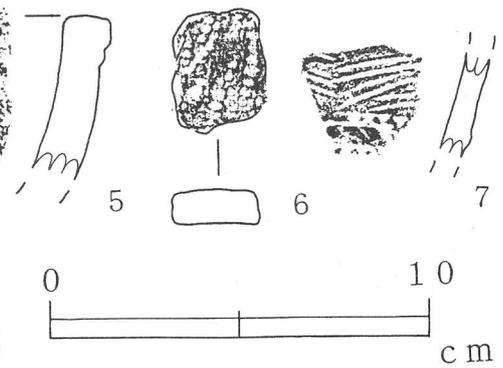
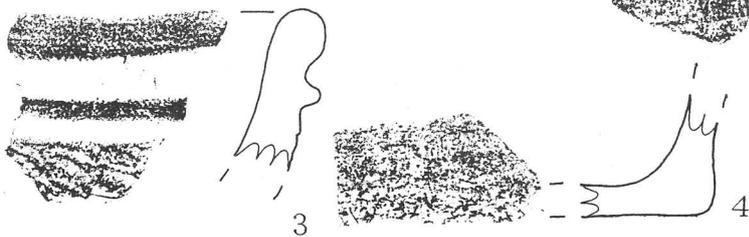
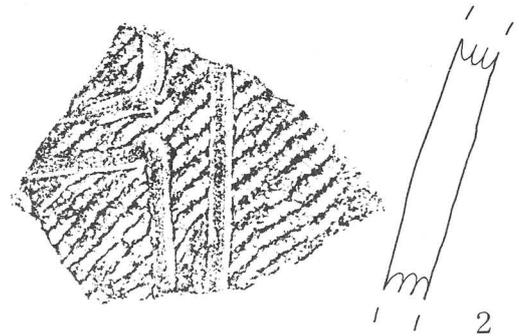
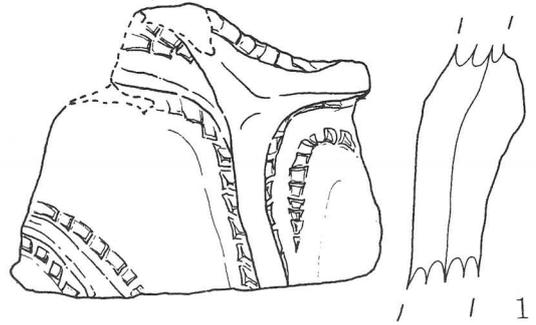
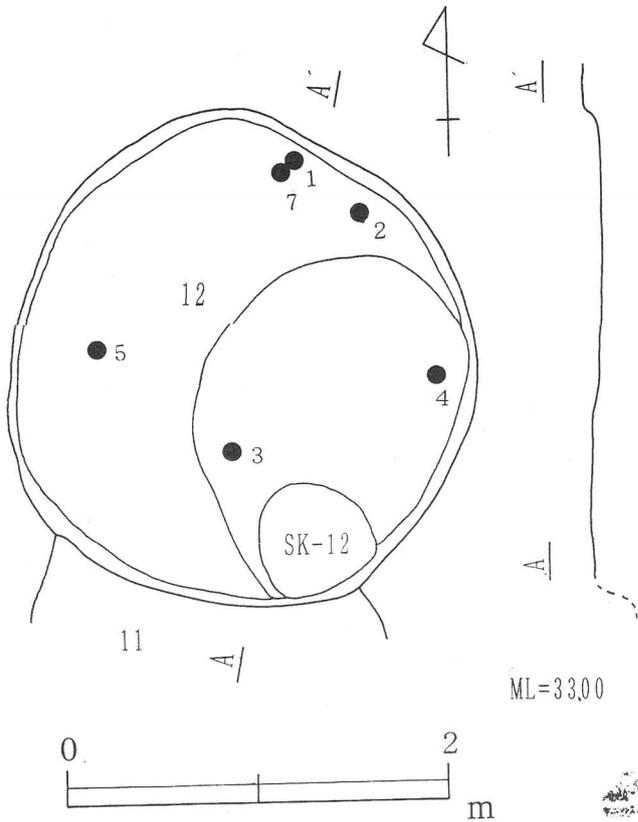
第5図 第10号小堅穴状遺構平面図・出土遺物実測拓影図

S1-11

番号	色調	含有物	粘性	締り
1	暗褐色	ローム粒、小ブロック藍土粒子	粘り	粘り
2	褐色	ローム小ブロック少量	粘り	粘り



11号



第6図 第11・12号小堅穴状遺構平面図・出土遺物実測拓影図

## (2) 土 坑

### 第 1 号土坑 (第 7 図、8 図)

本遺構は、削平を受けた部分に位置し検出された。掘り込みは20cm程認められた。長径1m、短径90cm程の円形状を呈し、底面は僅かに張り出しフラスコ状を呈する。底面は砂質粘土層の上面に近く締りはややある。覆土は一部投げ込み的感じで認められたが確認面の一部は攪乱が入り明確には把握出来ない。2、3、4層は自然埋積の可能性が高い。

遺物は9図1～5で、いずれも磨消部をもつ1、2は太い沈線が巡り、3は沈線区画内を磨消している。4、5は土器片錘で10.4gを計る。

出土遺物から加曾利EⅢ式の土坑と推察される。

### 第 2 号土坑 (第 7 図)

本遺構は、削平された部分と遺存部分との間に検出された。南側はかなり削平を受けて2号住居跡の北側6mに位置して検出された。東西に1.3m、南北1m程の長円形プランを呈する。掘り込みは20cm前後で、南側は10cm程であった。底部の締りはややあり一部袋状の掘り込みも見られた。南北に少量の粘土塊が認められた。覆土は、投げ込み的で複雑であった。

出土遺物は6片と少なく、図示出来る程の大きさのものはなかった。細片からは前述の1号土坑と同様の時期が推察される。

### 第 3・3' 号土坑 (第 7 図、8 図)

本遺構は、2号住居跡の西側2.5mに位置し検出された。西側の一部は削平を受け全容を把握出来ない。推定径1.3m前後の円形状プランの土坑の複合か。掘り込みは25cm前後で、底面はやや締りをもつ。3'も同様の遺構と思われる。覆土は3層で自然埋積、締り、粘性はややある。

遺物は少なく総数10片で、図示したのは9図6、7で、6は胎土に砂を含む。7は金雲母を多量に含む。いずれも無節の縄が施文される。

時期は加曾利E式期と推察される。

### 第 4 号土坑 (第 7 図、第 8 図)

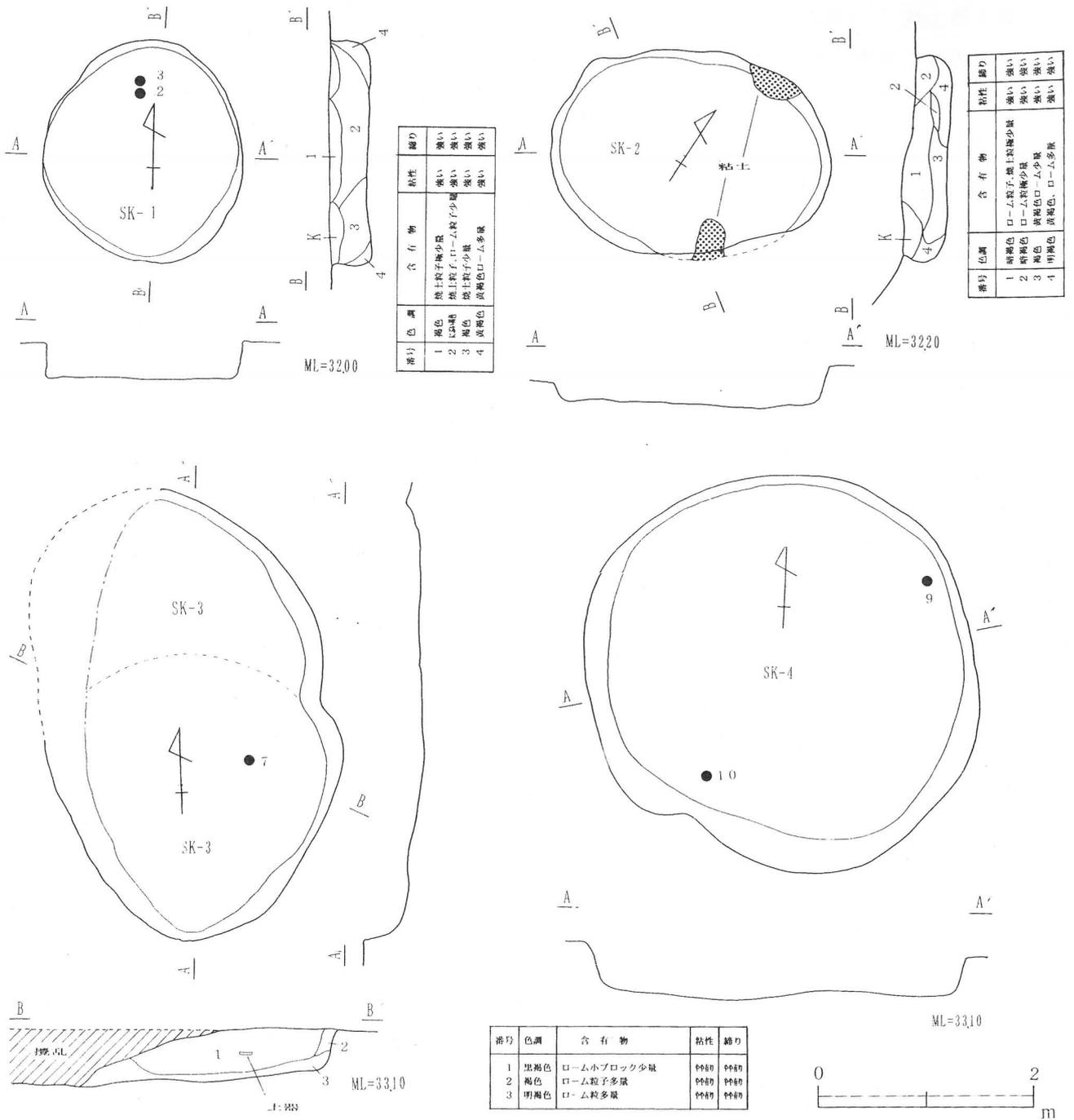
本遺構は、2号住居跡の南側に隣接し検出された。径1.8m程の円形状プランを呈し、掘り込みは20cm前後を測る。底部は締りがややあり中央部が弱く起伏している。壁面は、相対的にはだれた感じで北側は鋭角的、南側ではなだらかで対照的。

覆土は、褐色、黄褐色等でローム粒子、ブロックを含む。粘性、締りは強い。

遺物は少なくいずれも細片で総数20片、図示出来るものは少ない。9図8、9、10は底部と土器片錘で片錘は一部欠失するが40gを測る。底部は胎土に砂の混入が多い土器である。遺構プラン、遺物から加曾利E式期の遺構と推察される。

### 第 6 号土坑 (第 8 図、9 図)

本遺構は、2号住居跡の北側1mに位置し1号住居跡の下から検出された。径9m程のやや方形気味のプランをもつ。掘り込は60cmと深く円筒状形態をもつ。底部はやや傾斜をもつが締りはある。



第7図 第1・2・3・3'・4号土坑平面図

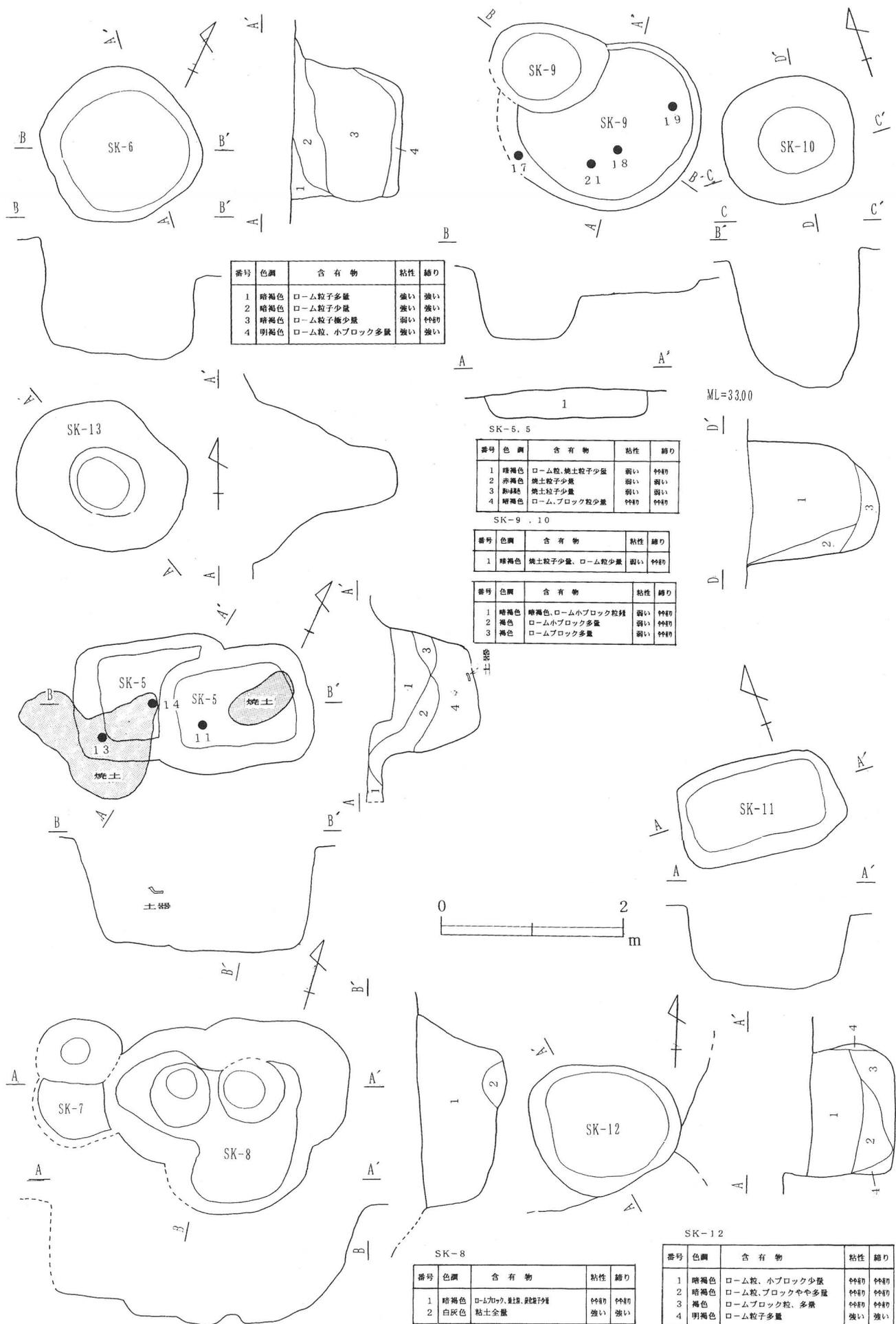
覆土は、一旦のめられた後は自然埋積が推察される。

出土遺物は少なく9図15が唯一図示した遺物である。阿玉台式の口縁突起部で山形状隆起線で渦文が施文、胎土に雲母、石英を多量に混入する。

第9・9'号土坑 (第8図、9図)

本遺構は、10号小堅穴状の西側2mに位置して検出された。径1m前後掘り込みは7~14cm前後で上部を攪乱されているため不規則である。底部は平坦で締りはややある。

覆土は1層で暗褐色、締りはややあり粘性は弱い。



第8図 第5・5'・6・7・8・9・9'・10・11・12・13号土坑平面図

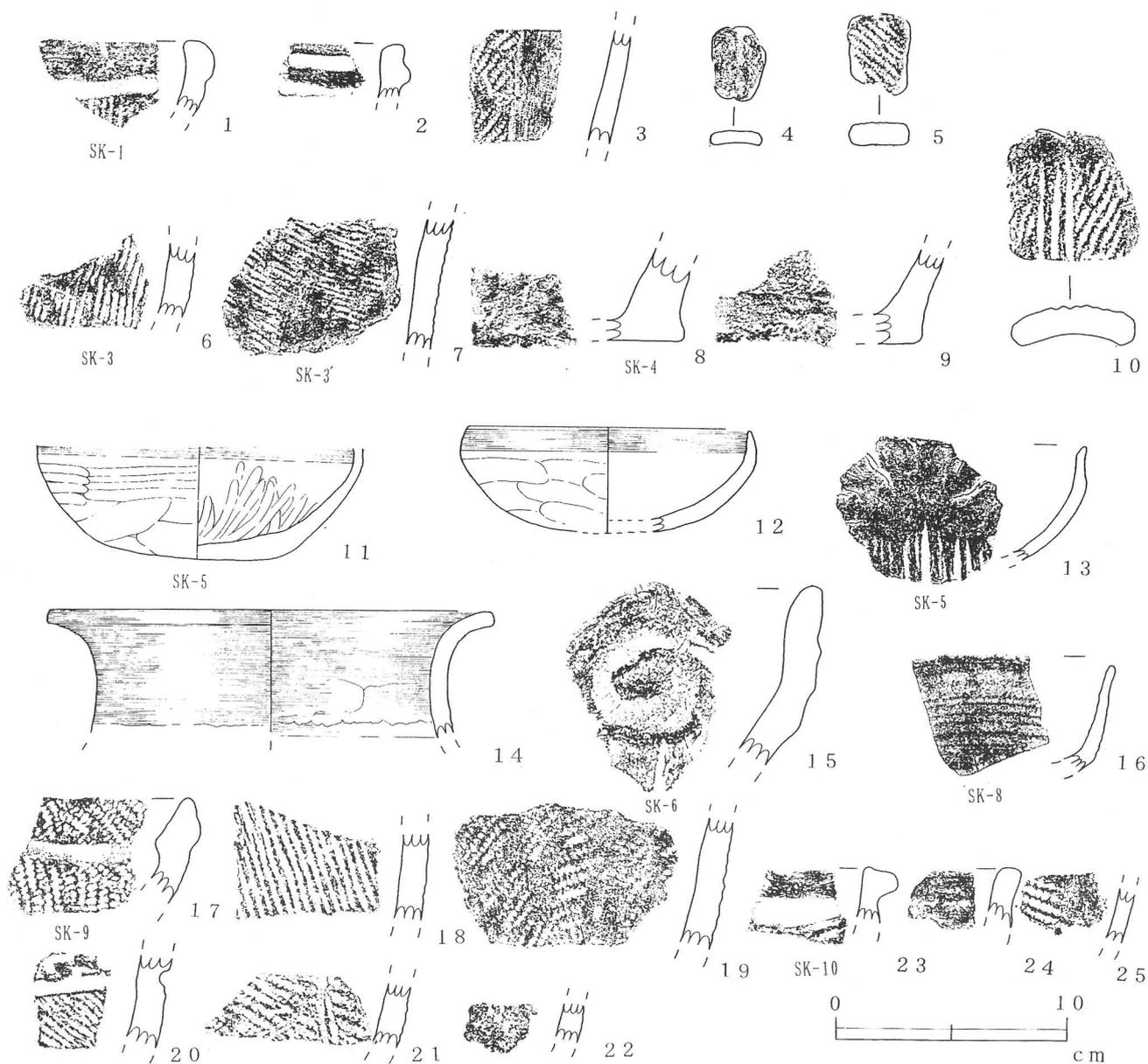
遺物は、8 図17～22が見られた。いずれも地文は縄文で17は口唇部は三角形状、内側に稜をもつ、胎土に金雲母、石英を含む大木系土器。19も同様な胎土をもつ。20、21、18は胎土に砂の混入が多い土器で加曾利E式土器。22は胎土に繊維を含む土器で前期黒浜式土器。

本遺構は、加曾利E式の新しい時期。9'はその中に掘り込まれた遺構で長径70cm、短径50cm、底部は平坦で締りをもつ。遺物は縄文土器が少量で時期は9号土坑とさほどの差は無いと思われる。

### 第10号土坑 (第8図、9図)

本遺構は、9号土坑の南側に並列して検出された遺構で径70cm前後の円形状プランをもつ。掘り込みは70cmと深く、底部は凹凸がみられ相対的にはU字状形態。

遺物は9 図23～25があるが総数20片と少なく図示出来るものは少ない。口縁部に隆帯を巡らす土器で加曾利E式の土器である。胎土には砂の混入が見られる。



第9図 第1・3・3'・4・5・5'・6・8・9・10号土坑出土遺物実測拓影図

第13号土坑 (第8図)

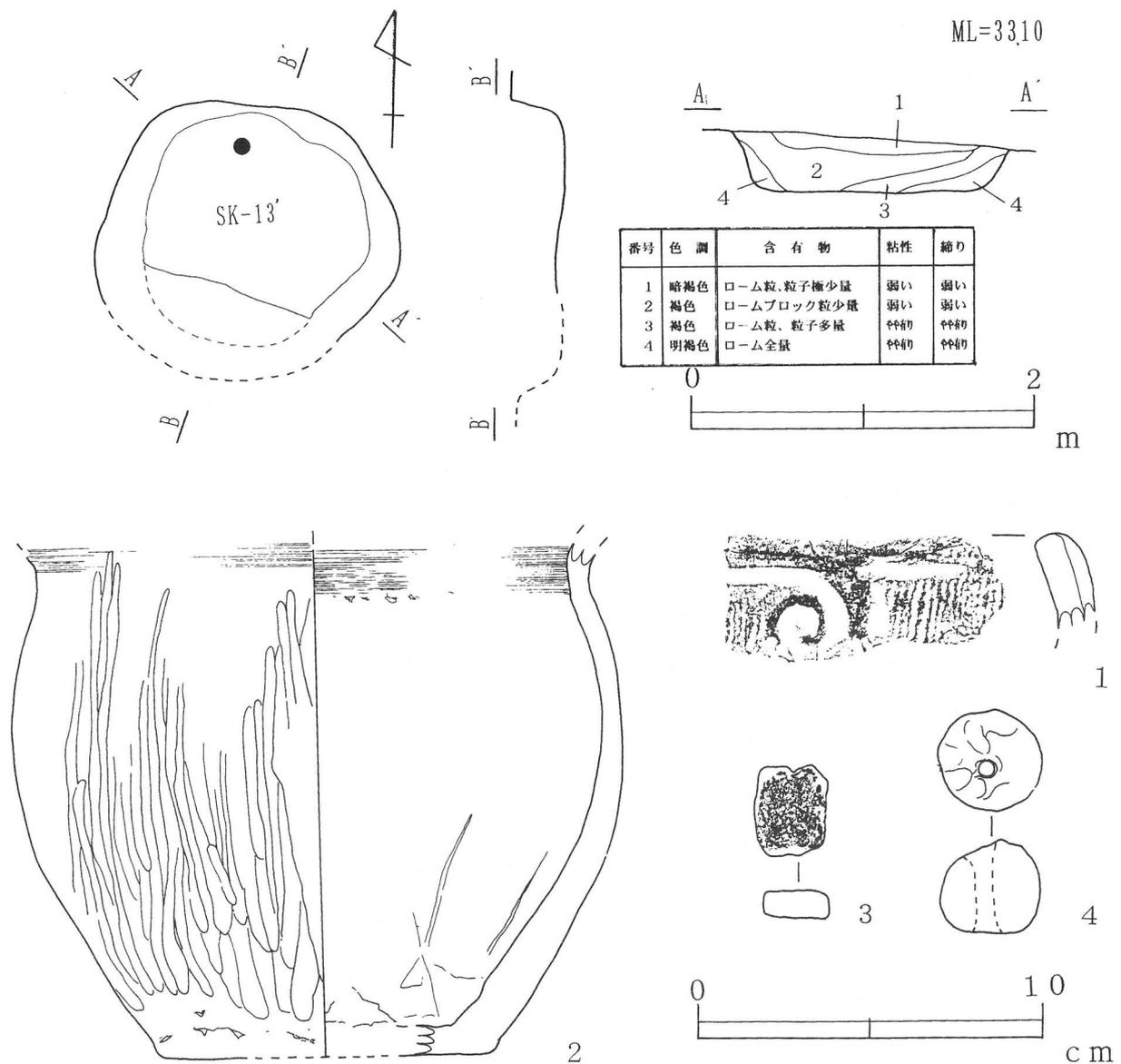
本遺構は、調査区の最も南側に位置し11号小堅穴状の南2 mに検出された。径1 m程の円形状プランで掘り込みはU字状で1 mと深い。感覚的には大きな柱の『柱穴』状と理解できなくもない。出土遺物は皆無の為、時期を特定はできないが位置関係から9、10、11、P1は相対的に見れば住居跡柱穴の可能性が窺える。

第13'号土坑 (第8図)

本遺構は、2号小堅穴状の西側3 mに位置して検出された。径80 cm程の円形を呈する。掘り込みは15 cm前後と浅く底部は、平坦で締りはややある。南側は欠失する。

覆土はレンズ状の自然埋積で3、4層は締り、粘性はややある。

遺物は少なく確認面では2の土師器が検出されている。覆土からは1の隆起線による渦文が見られ口縁部はキヤリパー形態。3は重さ6 gの土器片錘。4は土製丸玉で21 gを測る。形態、遺物から加曾利E II式の土坑と推察される。



第10図 第13'号土坑平面図・出土遺物実測拓影図

## 2. 古墳時代、奈良時代の遺物と遺構

### (1) 住居跡

本遺構からは古墳時代の住居跡 1 軒、土坑 2 基、奈良時代の住居跡 1 軒、土坑 が検出された。以下これらの遺構と遺物について述べる。

#### 第 1 号住居跡 (第12図)

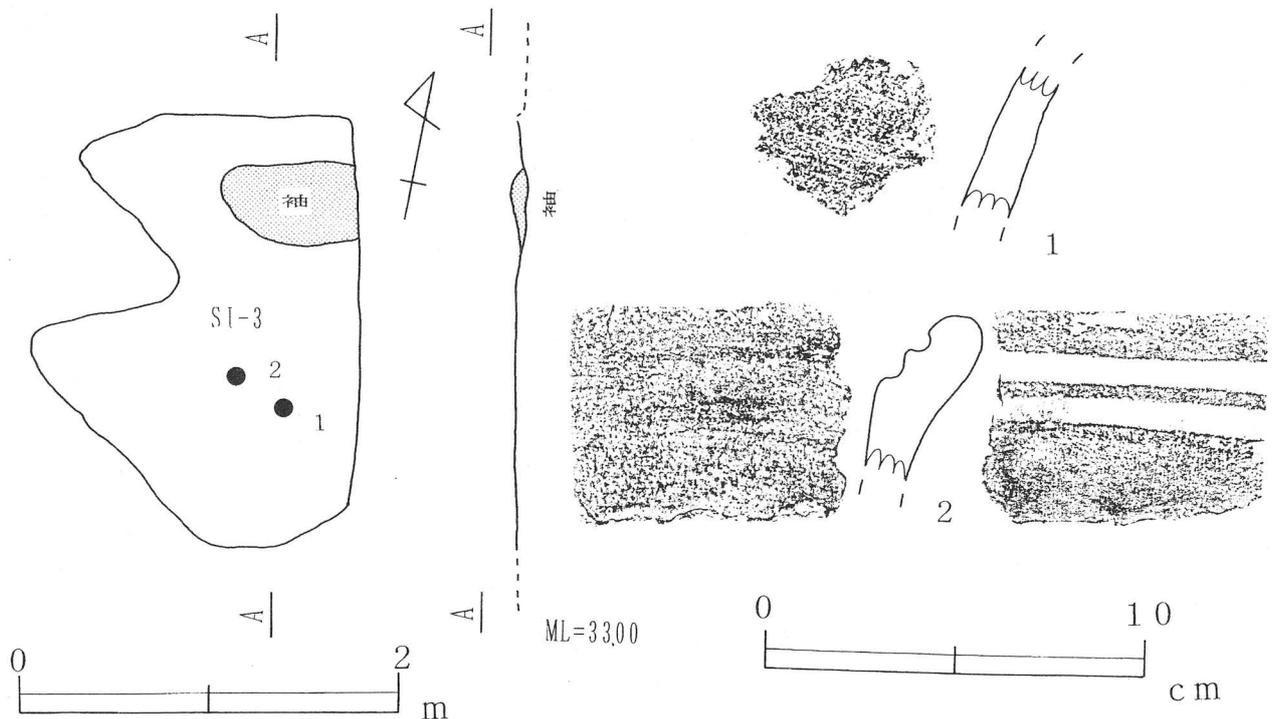
本遺構は、調査区の北端に近くに位置し検出された。北側、東側を欠失し明確なプランは確定出来なかった。辺 4 m 以上のプランをもつ方形の住居跡と推察されるが柱穴、竈は検出できなかった。下部に検出された土坑の関係からと推察される。

床面は一部では良く締り明確に把握され焼土、炭化材が散在し出土しているが北、西、南側の壁面近くでは明確では無い。北側の焼土は竈とし調査を行なったがたんなる焼土であった。覆土は 6 層に分類されたが焼土、炭化粒の混入の差である。

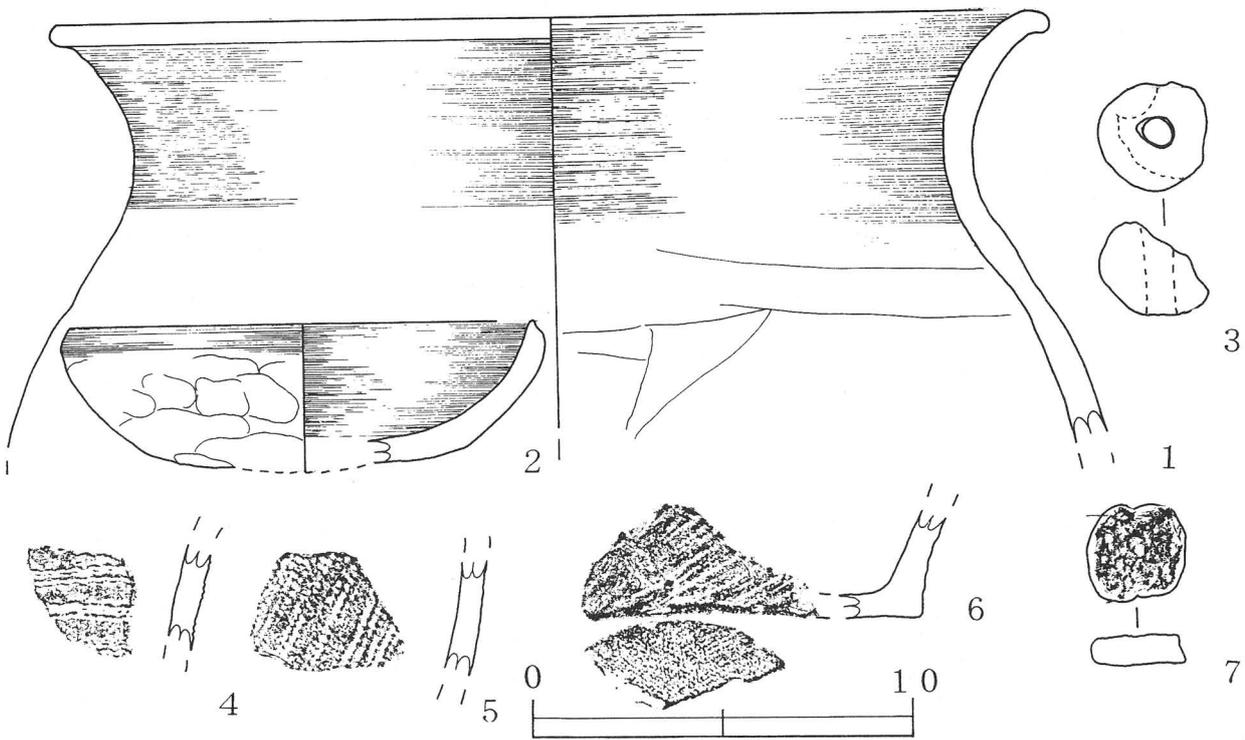
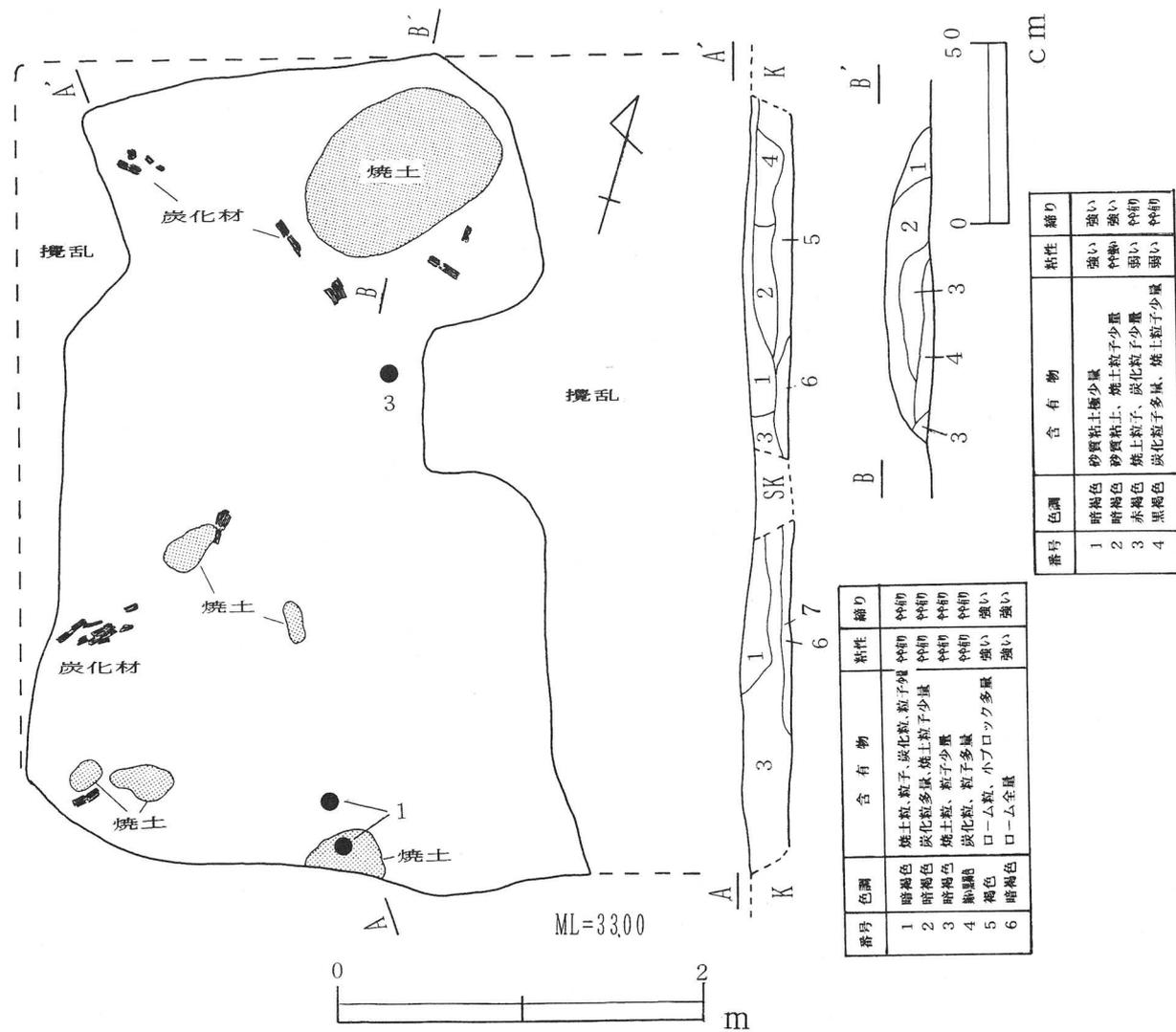
遺物は土師器が 50 片程検出されたが器形の窺えるものは少ない。1 は胴長の甕で口縁部のみで(く)の字状に外反、口唇部は開く。横ナデ調整、胴部はヘラケズリで器肉は薄い。2 の坏は 3/1 程遺存し黒褐色でヘラケズリ、横ナデで口唇部は尖る。遺物からは鬼高期Ⅲ期から真間期に入るか。甕からは鬼高期の範囲、その他覆土から 4、5、6 の弥生式土器胴部、底部が出土している。3 本単位の櫛描と二段の縄が認められる。その他土製丸玉、土器片錘がある。

#### 第 3 号住居跡 (第12図)

本遺構は 4 号住居跡の上 1 号住居跡の南側 5 m に位置していた。東側に砂質粘土の竈の袖が遺存していた。火床部は確認できない。床面は竈前のみ良く踏み固められていた。覆土は皆無に近く、確認面で床面が認められた。遺物は少なく図示できるものは皆無に近い。1 は外反する口縁部内側に 2 本の太い沈線が見られる。下位に位置する住居跡の遺物と推察される。本跡の遺物は皆無に近いが竈位置から鬼高期末前後か。



第11図 第3号住居跡平面図・出土遺物実測拓影図



第12図 第1号住居跡平面図・出土遺物実測拓影図

### 第15号住居跡 (第13図)

本遺構は、3号住居跡の西側に位置し検出された。攪乱と複合、切り合いで明確なプランを把握できず変形な図面になった。床面は明確な感じでは捉えられず壁面の立ち上がりも北側のみで、欠失部と攪乱で掘れる範囲を掘切った。不整形に長方形プランの遺構になり住居跡か判断に迷った。原因は遺構の中央部に攪乱が見られた事に起因するが判断の迷いも存在したかと思う。2軒前後の複合遺構の可能性が推察される。

出土遺物は須恵器片が100片程上部の攪乱部分から回収された。1、3は攪乱部から出土したもので、1は器肉の薄い胴下半部、輪積み痕を残す。2は須恵質土器で平行叩き目もつ胴部である。3は一応遺構の外から検出された台付杯で須恵器。これらの遺物から国分期初頭の遺構の存在が推察される。攪乱がひどいため本遺構については断定は不可能である。本時期の遺構が近くに存在したことは窺える。

### (2) 土坑

古墳時代、時期不明の土坑が検出された。以下これらの概要について述べる。

### 第5・5'号土坑 (第8図、9図)

本遺構は、3号土坑の北側2mに位置し検出された。方形土坑が複合の感じで検出されたが覆土からは同一の可能性が窺えた。長辺70cm、短辺50cmと80cm、70cmの土坑か。掘り込みは60cmとほぼ差は無く、位置関係に10cm程ずれが見られる。覆土は焼土が多量に認められた。土層は相互に続き、これらから埋積は同時期が推察される。4層は人工的埋積、その後焼土の投げ込み、最上に濃淡の差はあるが全体的に焼土が見られ、とくに5'号土坑の上には10~20cmの厚さで認められた。

平面プランにずれが認められ、底部では僅かに深さに差がある。これらから掘り込みの時期差はあるが埋積、使用形態、性格は同一と推察できる。

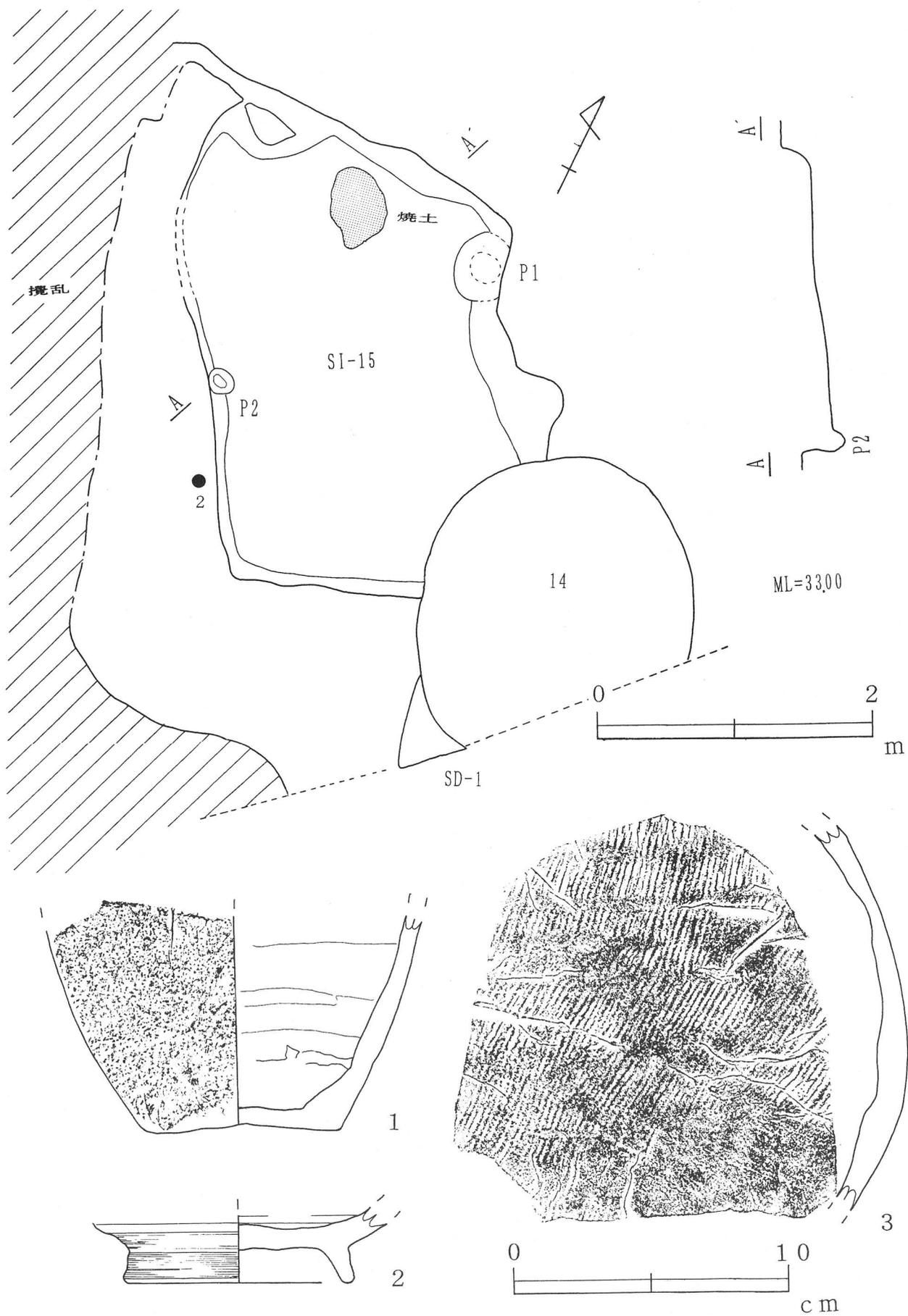
遺物は9図11~14で、11の坏は口径13.5cm、6cmと深く半球形状。口縁部の一部が欠失するが完形に近い。内側は赤彩が見られ器面はヘラケズリ、ナデ調整が見られ、底部は平底で「×」のヘラ書きが見られる。5号土坑からは12の坏が破片で出土し、復元により1/2程になった。これらは意識的に破損を受けたとも理解される半球形で11よりやや小型で粗雑な作りで内外ともヘラケズリ、胎土に砂の混入が多い。半分程は黒褐色を呈する。13も坏で、体部から底部にヘラによる「キズ」が見られ赤褐色、横ナデ。坏の器形からは鬼高期の遺構と推察される。14は甕の口縁部で長めの頸部から口縁部は短く外反する。口唇部はカット状でナデ調整。いずれも1、2層から出土している。

### 第7号土坑 (第8図)

本遺構は、15号住居跡の西側に見られた土坑で上部は欠失し全容は不明。遺存部分から推定すれば北、東側は8号土坑に掘り込まれている。径80cm前後の円形か。遺物は皆無で時期は不明。

### 第8号土坑 (第8図)

本遺構は、前述のように7号土坑の東側、15号住居跡の中に位置し不整形な形態で長辺1.3m、短辺1.1m、深さ70cmで底部に小掘り込みが見られる。



第13图 第15号住居跡平面図・出土遺物実測拓影図

遺物は土師器破片、須恵器破片等 100 片程出土している。いずれも細片で故意に投げ込まれた感じで覆土も投げ込み的で粘土塊、焼土等が混入していた。時期等は不明である。さも新しい遺物は真間期甕が見られた。底部に 6 孔をもつ須恵器が見られた。

第 11 号土坑 (第 8 図)

本遺構は、10号土坑の南側に位置し検出された。東西80cm、南北55cmの長方形プランで掘り込みは40cm前後を測る。底部はゆるく傾斜し中央がさも深い。締りはややある。遺物は縄文土器、土師器、須恵器の小破片が20片程出土した。

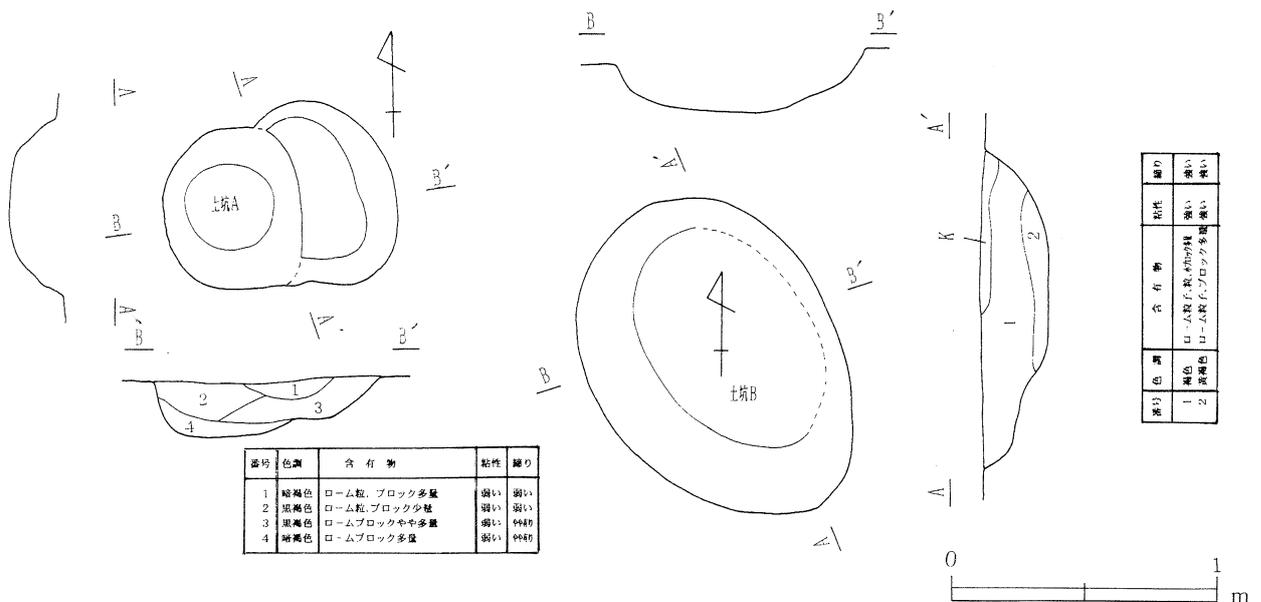
覆土状態と遺物の出土状態等から後世の攪乱、甘薯の貯蔵穴の可能性もある。

●土坑 A、B (第14図)

本遺構は削平を受けた部分から検出された。上部約 1 m を削平された下から検出されたもので円形、長円形状を呈する。覆土は投げ込み的感じが見られる。底部は粘土質層に到達していた。Aの覆土の締りは弱く調査時点で、後世の攪乱の可能性が推測された。Bは、粘性、締りは強いがロームブロックを含む為、本土坑も攪乱の可能性を指摘しておきたい。

遺物は縄文土器、土師器、須恵器が10片程出土している。本遺構に伴うとは思われない出土状態。

◎本遺跡には明治期まで、民家が2軒存在していたとの話が残りこの時期の攪乱が存在していると理解される。多くの攪乱、欠失は削平によるもので攪乱は民家の存在時の掘り込みと推察される。



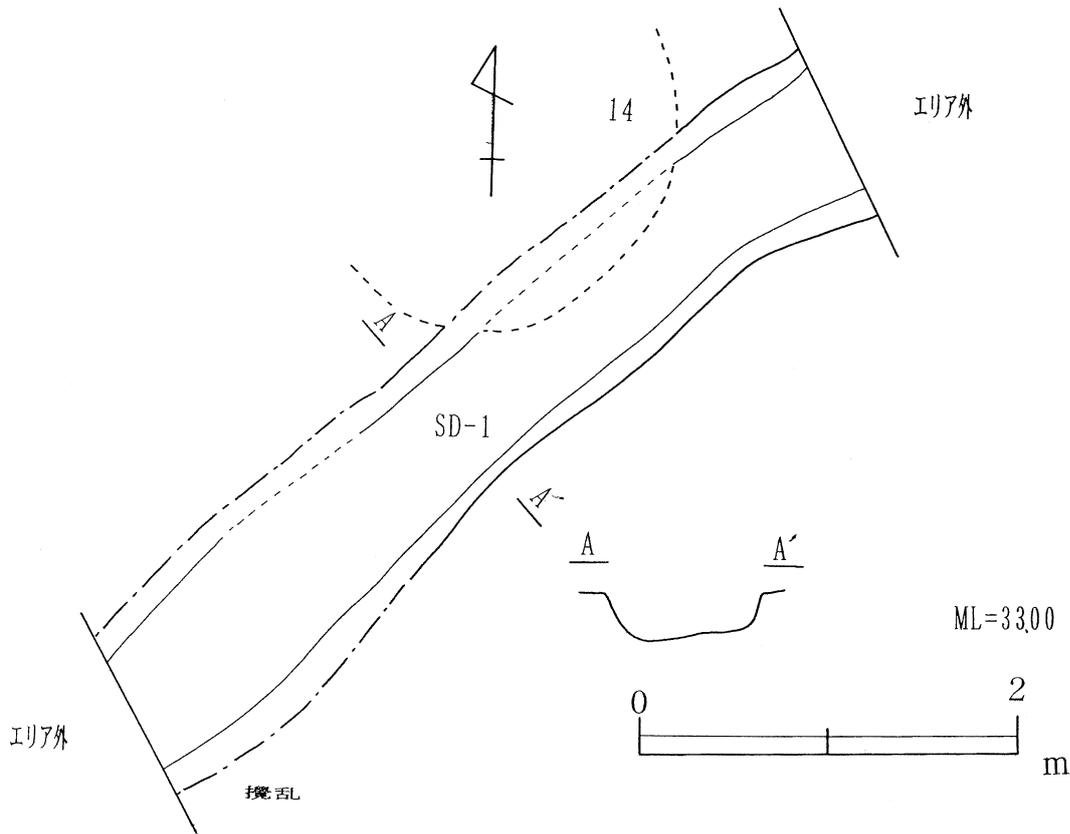
第14図 土坑 A・B 平面図

3. 溝

本遺構は、調査区の中央南よりに東西に掘り込まれた溝で長さ 4.8 m、上幅 80 cm、深さ 25 cm、底幅 60 cm 前後の台形状掘り込みをもつ。覆土は 3 層でレンズ状の自然埋積、締りは強いがかなり

重機の移動があり不明。

遺物は、縄文、土師器と須恵器が出土している。形態の窺えるものはない。遺物からは奈良時代真間期が推察される。



第15図 第1号溝平面図

#### 4. 表採遺物

本遺跡の確認調査時点での表面採取、遺構確認時の遺物及び攪乱層から出土した遺物を一括し表採遺物とした。

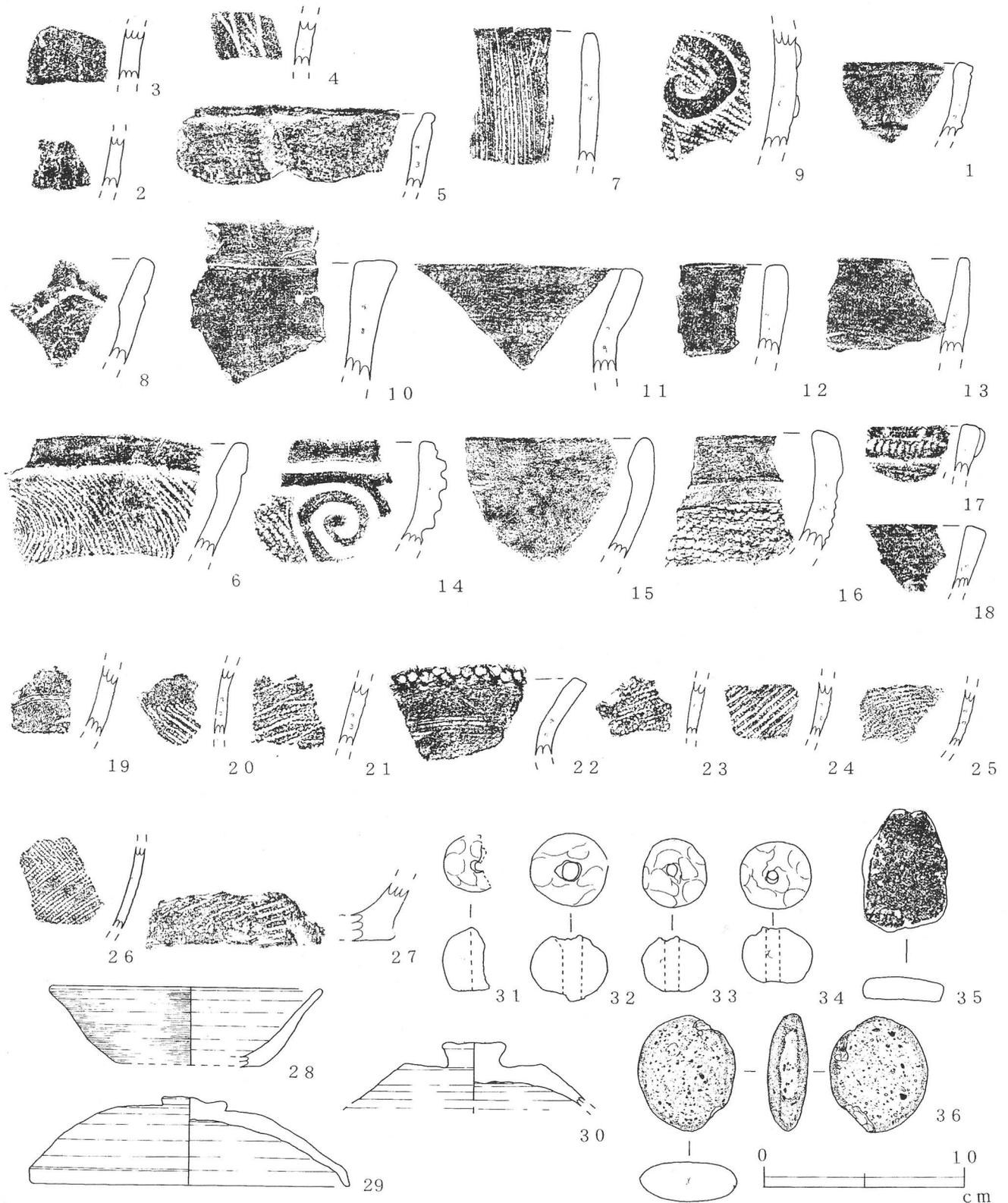
1は胎土に少量の繊維を含み口唇部は、平滑で内側に弱い稜がみられる。棒状工具押し引きの沈線をもつ。胎土に少量の雲母、石英を含む。田戸上層式か。

2～4はアナグラ属、ハマグリ等による貝殻波状文をもち胎土に砂の混入が見られる浮島式土器。5は鋸歯状文を持ち口唇部は小さく折り返し胎土に砂を混入する。6、7は6、7本単位の櫛描き沈線を縦位、斜め等に施文している。折り返し口縁をもつ6と単純口縁の7は口唇部が三角状に尖る。共に胎土に砂を含む。浮島期の8は山形突起に棒状工具で押圧を加え半截竹管押し引き文をもち内側に弱い稜をもつ阿玉台式土器。10、15は磨消される鉢型土器口縁部で阿玉台式。9は釣り針状の隆帯を添付する大木7b式土器。11、12、13は器面の磨消された土器で口縁部が外反する11と直立気味の12、口唇部が薄く尖り気味の13があり浅鉢、鉢等の器形で大木7b系の土器。14～16は磨消の口縁部に隆帯による渦文、磨消、沈線等が見られる。いずれも口縁部はキャリパー状を呈する加曽利E式。

17、18は粗製の安行Ⅲ式土器の口縁部。

19から27は弥生式土器で附加条縄文が施文されるものと4本単位の沈線を施文する17が見られる。22は口唇部に指頭による押圧を加える。23は底部で十王台式土器。

28、29は須恵器坏、蓋である。坏は体部から器肉を減じ外反しながら立ち上り口唇部は器肉は薄く丸く収める。蓋は天井部が膨らみカエリは直立、摘みは扁平化する29と肩部が平坦で直線的な伸びをもつ30は摘みは高いが宝珠部分は扁平化している土師質土器で八世紀代。28、29は七世紀中葉。



第16図 表採遺物実測拓影図

## 第V節 総括

本遺跡からは縄文時代の小堅穴状遺構、土坑等と奈良時代の住居跡などが検出された。調査開始時には、遺跡の大半は欠失し僅かに50m程が存在していたに過ぎなかった。遺跡の範囲はおよそ3000m、その中に僅かに前述のとおりである。調査では残存部に垂直気味の掘り込みが観察された。(2, 10, 11, 12)があり平面的な4号は攪乱の為平面プランが確定出来なかった。炉を持つ住居跡と推察はできる。形態は確認面からは無理である。炉からは加曾利E式土器が出土している。円形状でも大半は加曾利E式前半の時期形式が大半であり土坑を含め阿玉台式後半の土器の伴出が見られた。

土坑は、径1m前後が大半で掘り込みは30cm以下で6, 12号等にやや深い掘り込みを残すのも見られ底部近くで弱く張る掘り込みが見られる。10号も掘り込みはやや深く「U」字状を呈する。出土遺物は少ない。確認に近かった。

遺構の残った部分も上部がかなり削平され欠失していた。依って遺構の遺存率は悪い。検出された遺構は、小堅穴状土坑、土坑が大半を占めた。住居跡と推察できたのは奈良時代前後のものでこれも一部欠失し、完全に遺構を把握できるものは皆無に近い。

遺構は、円形、もしくは楕円形状の形態で円形状とややフラスコ状に近い、底部がやや掘り込まれるものも見られたが把握できるものは少ない。いずれも確認段階の面から。

その他の土坑は5, 5号土坑から土師器坏形土器が出土して居る。坏は、安定した平底で内側に赤採が見られる。検出された遺構の中では方形状形態で特異なプランを呈する。その他、土坑では円形状、楕円形状等が見られたが特筆すべきものは無く、遺物も皆無に近く時期の決定には形態、遺物を用いたが確定できるものは少ない。伴出するものは須恵器片が見られいずれも叩き目が見られ器肉は薄く粗雑な作りの破片が多数見られた。これらから本遺跡調査部分から見限り奈良時代末が一応遺跡の終末期の可能性が考えられる。尚、中世には「道城」の字名から在地名主の館跡が台地先端部に存在した可能性が高い。

結論的に言えば欠失部分があまりにもひどく、確認、残存した部分でも上部は削平を受けて遺跡は無いと結論があつた程であり、調査は緊急待った無しのものであった。

本遺跡で特筆すべきは、小谷の反対側に大規模な貝塚が検出されたことで、今日まで多くの踏査が行われたにもかかわらず未確認の貝塚が存在したことは「分布調査」の重要性が改めて指摘される。前回の第一次の調査でもかなり大きな貝塚が未登録であった。今回も調査終了の際に台地西側の斜面下部から少量の貝殻の散布が確認された。时期的には中期阿玉式～加曾利E式前半の土器と前期の浮島式の土器が認められた。

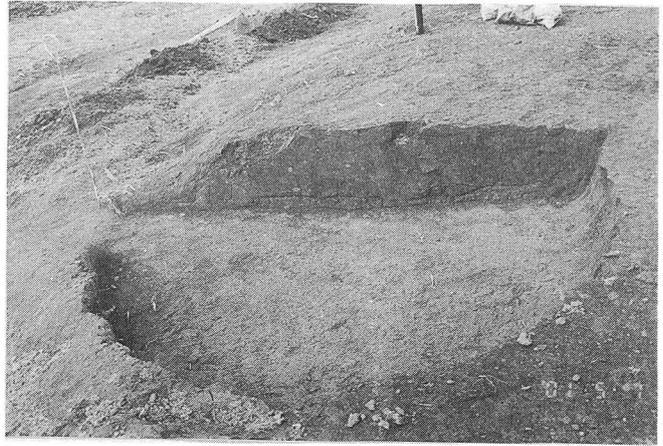
遺構、遺物の報告に近い報告書になったが周辺には相当数の遺構が存在した事が裏付けられる。許認可時の体制の整備、確認調査の必要性を痛感する。(文責、汀)

# 抄 録

フリガナ	ドウジョウタイライセキダイニジハクツツチヨウサホウコクシヨ							
書名	道城平遺跡第2次発掘調査報告書							
発行者名	麻生町教育委員会・道城平遺跡第2次発掘調査会							
所在地	〒311-3892 茨城県行方郡麻生町麻生1561-9							
編集者名	汀 安 衛							
編集機関	鹿行文化研究所							
所在地	〒311-2211 茨城県鹿嶋市青塚718-3							
発行年月日	西暦2002年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ドウジョウタイライニシセキ 道城平西遺跡	アソウマチ 麻生町 オオアザアソウ 大字麻生	08421	052	35° 59' 30"	140° 29' 52"	2001.04.28 2001.05.22	60 m <sup>2</sup>	土砂採取に 伴う調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
道城平西遺跡	集落跡	縄文時代中期 奈良時代末期	小堅穴状 土坑	縄文土器 貝			東側は 大規模な 貝塚をもつ	



調査区と完掘状態北側から



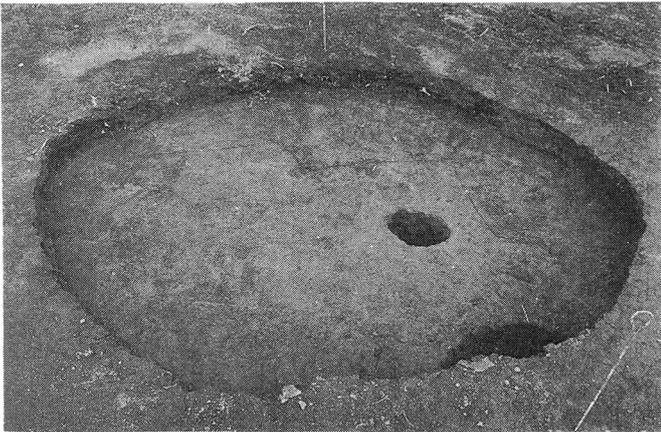
3号土坑土層



10号小堅穴状遺構



3、3' 土坑完掘



12号小堅穴状遺構



13号土坑



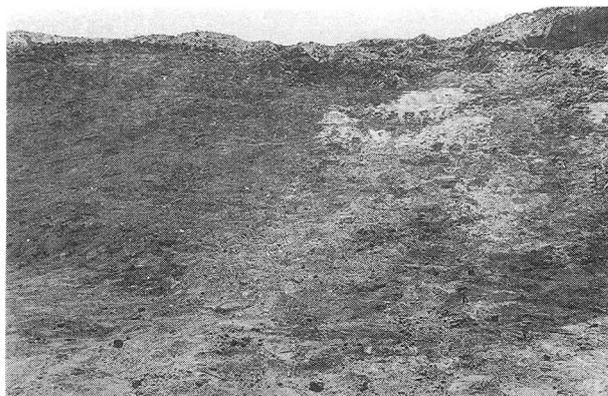
PL-1 11号、12号小堅穴状遺構



4号住居跡



3号住居跡竈袖



貝塚調査前状態全景



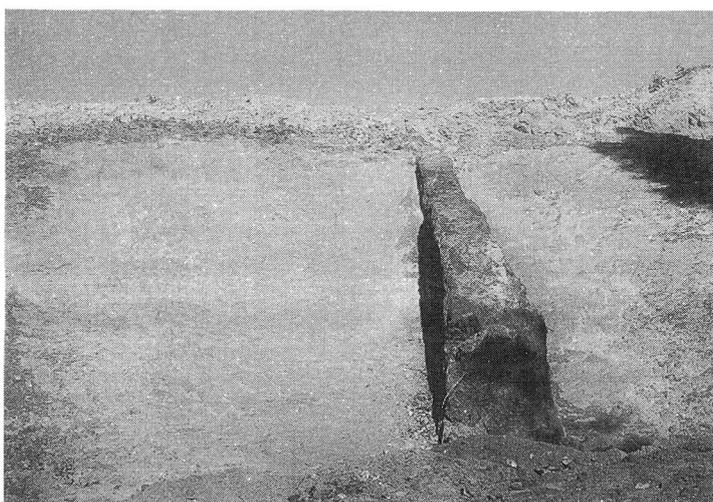
4号住居跡炉



貝の散布状態



5号土坑坏出土状態



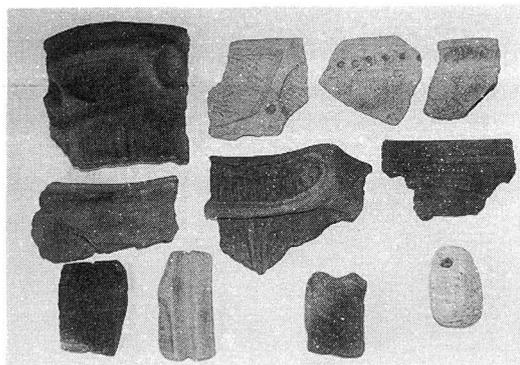
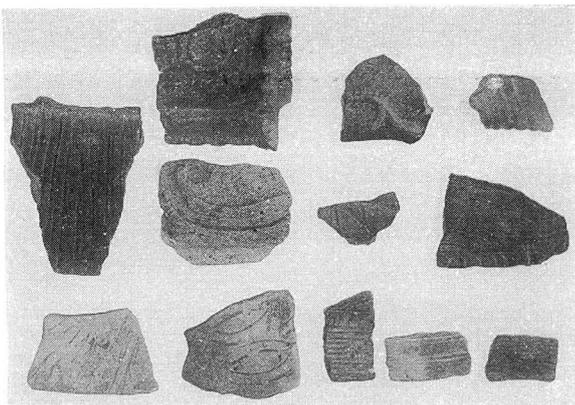
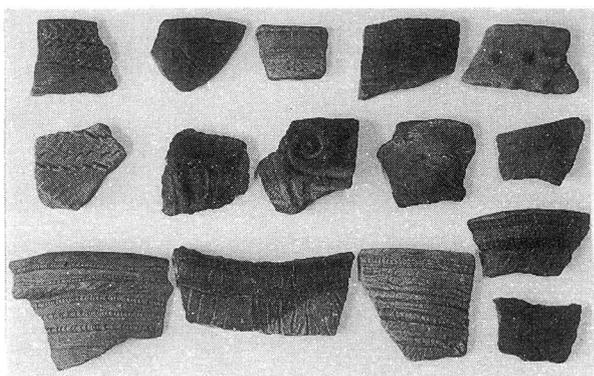
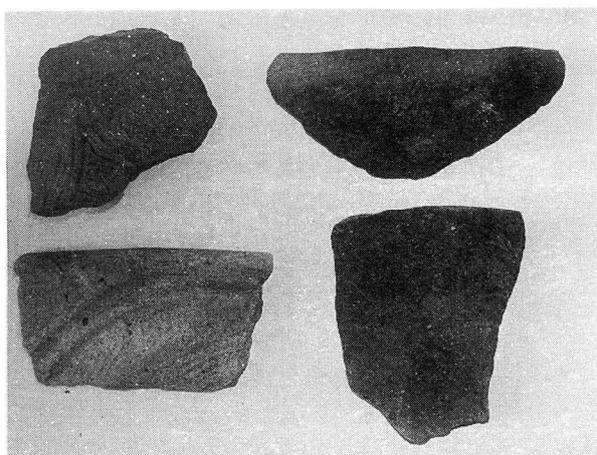
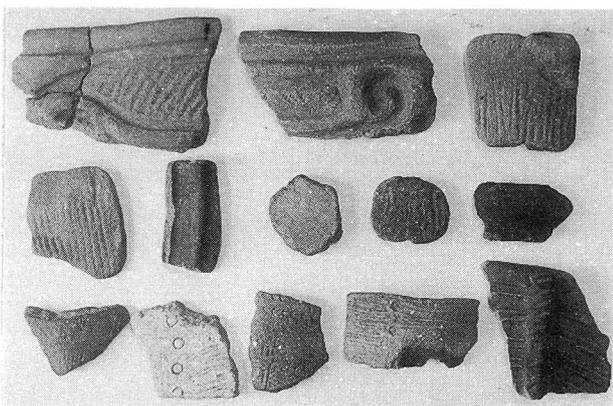
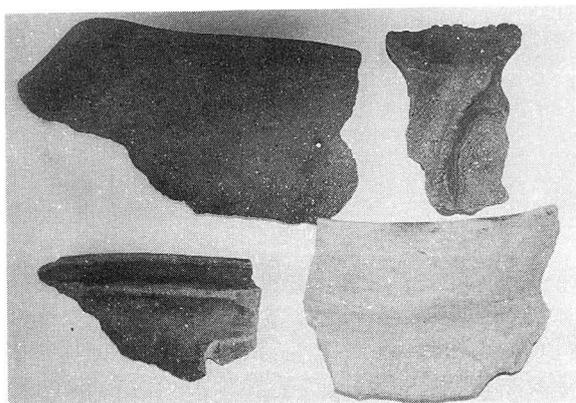
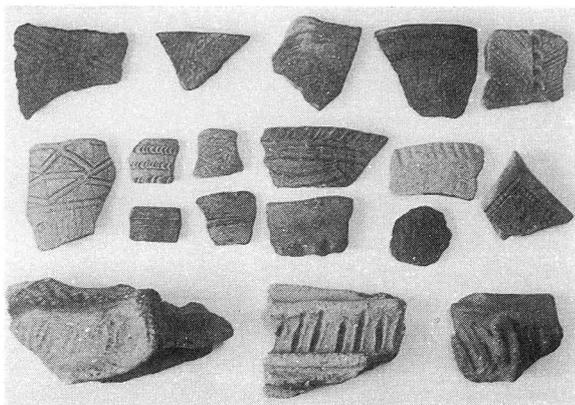
調査終了と土層ベルト



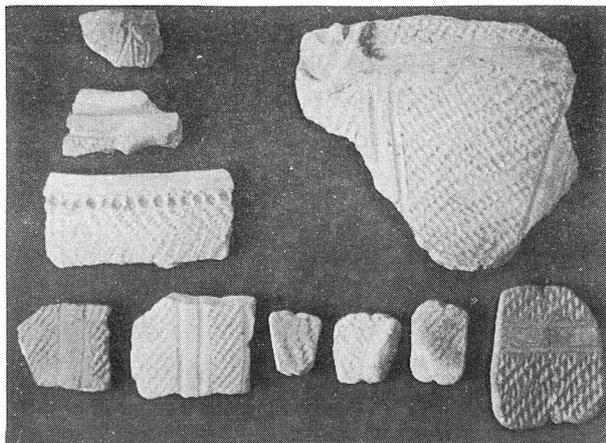
X住居跡?



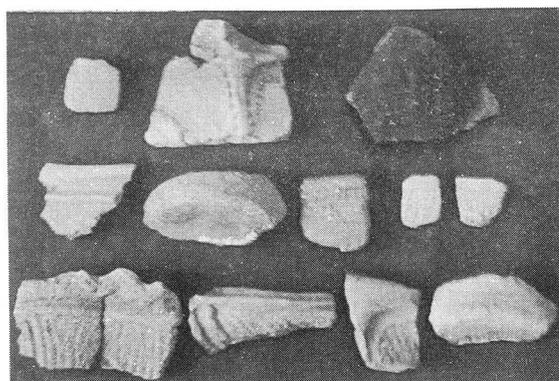
作業風景



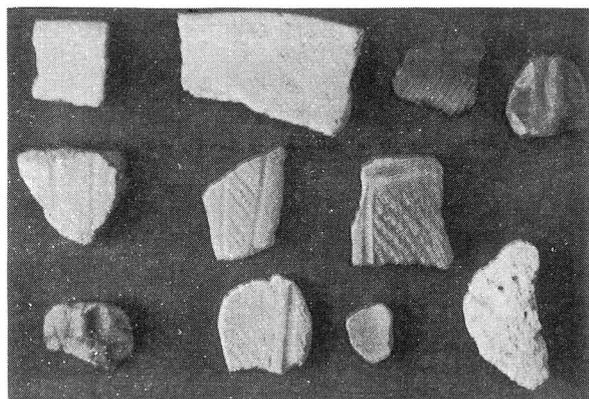
PL-3 調査区西側、小地点貝塚出土土器



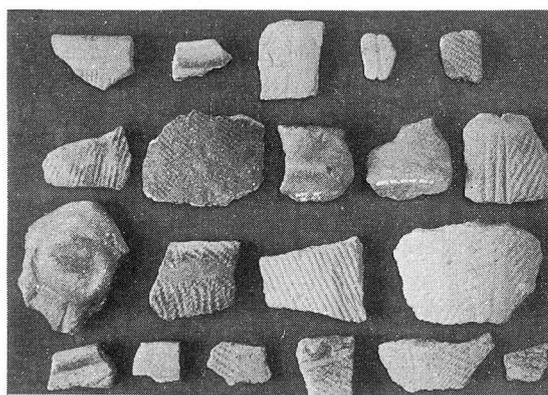
2号小堅穴状出土



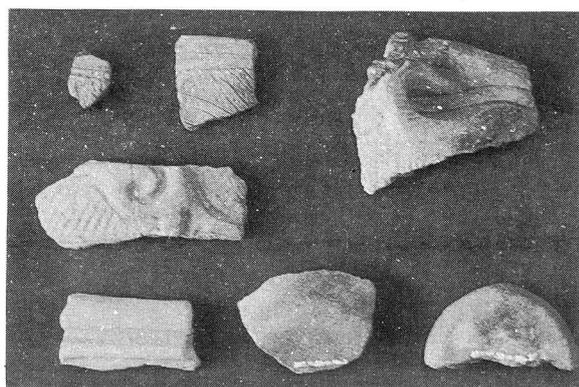
11、12号小堅穴状出土



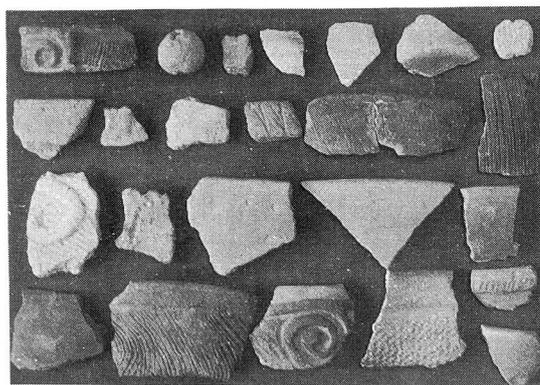
4号小堅穴状出土



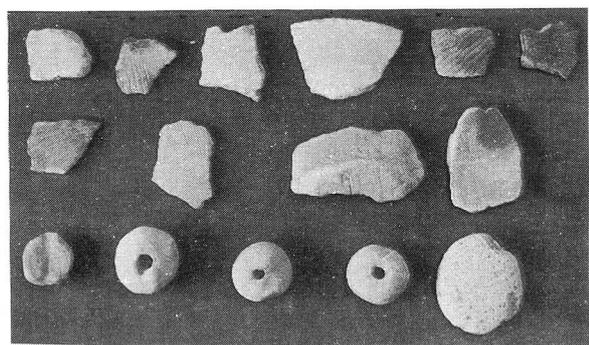
1、3、3'、4、5、5'、6、8、  
9、10号土坑出土遺物



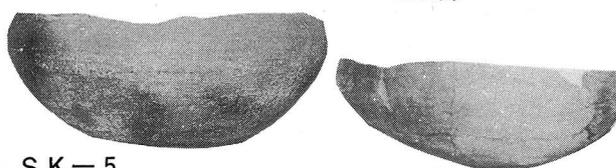
10号小堅穴状出土



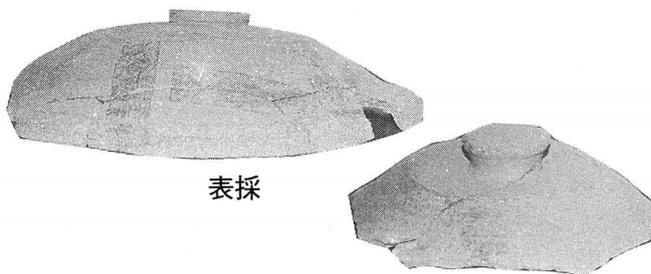
SK-13' と表採



表採



SK-5



表採

# 道城平遺跡

## 第2次発掘調査報告書

2002年6月

編集 鹿行文化研究所  
汀安衛  
鹿嶋市青塚718-3

発行 道城平遺跡第2次発掘調査会  
麻生町教育委員会  
麻生町麻生1591-9

印刷 久保田印刷  
麻生町四鹿963-20